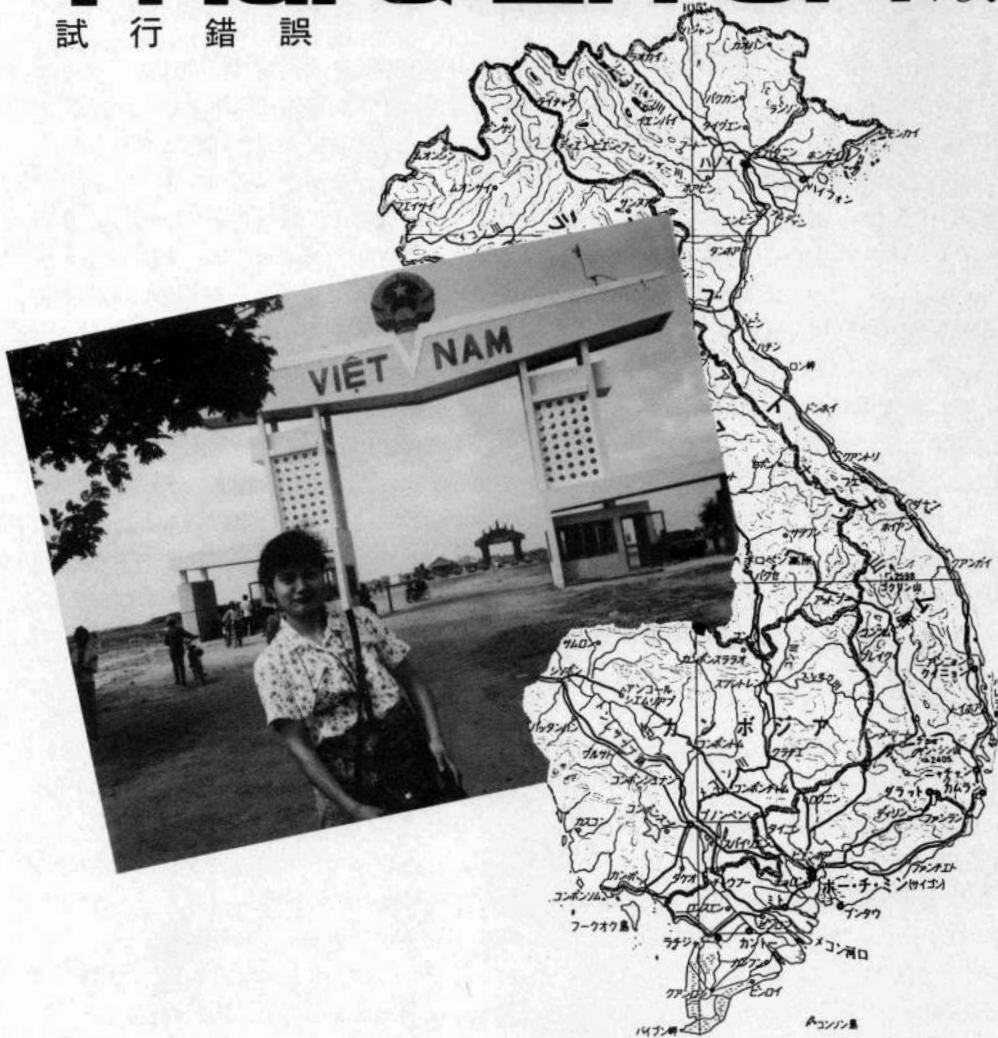


Trial & Error No.99

トリアル・アンド・エラー
試行錯誤



特集 『戦後』の終わらない国から

ベトナムの歴史	3
我が青春の地ベトナム	6
『戦後』の終わらない国から	8
1990年度ベトナムでの復興協力活動(計画案)	10
トゥーさんのこと	12
エチオピアプロジェクトの今後	16
生きるための農業	19
日本の開発教育(2)	22

いつも戦っていた国、ベトナム

ベトナムに生まれるということは、わずかな例外を別にして、常に非常に厳しい人生を生きねばならないことを意味する。ベトナムの近代・現代は、いつもその時の最強国を相手に戦ってきた。1975年の「サイゴン解放」にいたる独立と民族解放の戦いは、中国（千年）、フランス（百年）、日本（4年）、アメリカ（20年）におよぶ。そして家族の離散、父、夫、息子の戦死、女性や子供など一般人の被災、家を失い、土地を荒らされ、生まれ故郷を離れざるを得ないといった、最大級の不幸が普通の人々の間に日常化した。常に全土が戦場であったわけではないにしても、国民が無条件に平和を楽しめた日々は限られていた。その結果、家族単位でも国としても、安定した生活と経済の基礎を確立するのは不可能であった。その日をやりくりして、生き延びていくのがやっと、というのが普通の人の暮らしであったろう。強国に目をつけられたベトナムは、世界史的な侵略の被害者であった。

1975年以後はいわば「勝ってしまった」不幸か、あるいは傲慢^{ごうまん}にみえたのか、米国など西側諸国にうとまれ、アジアの超大国中国には嫌われ、ソ連との友好関係にのみ一方的に傾斜していった。特に、ベトナムがかかえた国境紛争の「究極的解決」として、ベトナム軍が主力となって行った、「民主カンボジア＝ポルポト体制」打倒（1979年初め）では、「ポルポト体制」の地獄から救われたカンボジア人から感謝されたものの、以後、中国からは「懲罰としての軍事行動」を受け、西側諸国から強烈な批判と経済封鎖、援助の凍結を受けることとなった。またかつてアジア、アフリカ、中南米諸国民から、「民族解放の輝く星」と見なされた時期もあったが、このカンボジア侵攻がきっかけとなって、「非同盟諸国」の有力メンバーをはじめ第三世界諸国におけるベトナムの評判も大きく下がってしまった。これ以降国としてのベトナムは、次々にマイナス・イメージ（経済政策の失敗、底無しの貧困、近隣諸国へのポート・ピープル流出など）をひきずり、ベトナム国民は、

戦争の傷痕をいやす余裕もないまま、目前の生活苦からぬけだす事を最大の目標としつつ、その生活苦と貧困は年々深まるという窮状にある。

今日、ホーチミン市（旧サイゴン）を訪れると、外国からの商社員、旅行者とまじって、ホテルのロビーなどで、アメリカからの元米兵のグループに出会う。20歳前後で「ベトナムでの戦争」に送りこまれた彼らも、現在でっぶり太った40代。「感傷旅行」もあるだろうし、かつて戦場で敵味方として戦ったベトナム人と、当時のことを話し合っている人もいる。また親類にあたるのか、友人が残した家族なのか、ベトナム人の母親と混血の子どもを歓待し、今後の生活やアメリカへの定住のこととか、一所懸命話しているグループもいる。混血の子どもといっても、もう10代後半から20代の青年になっており、みかけはある程度外国人であるが、日常ベトナム語で暮らしているせいか、英語はたどたどしい。元米兵のなかには、過去の戦争での贖罪^{しよく}の意識であろうか、ベトナムの孤児院、小学校、障害者の施設を訪問し、支援をしている人たちも少なからずいると聞いている。総じてこれら直接かかわった人たちのベトナムへの思いと反省は、体験に根ざしたものだけに、また除隊後も長い時間をかけて考えてきただけに、率直であり真摯であるように感じた。

ひるがえって日本を考えてみると、1960年代に強力な反戦運動はあったものの、かわりが「間接的」であっただけに、その後は経済成長＝ビジネスに忙しく、「ベトナム戦争」という歴史的事件は容易に風化し、ベトナムの国と人は忘れられ、日本はあの戦争で稼いだという事実だけが残っているような気がする。そしていま再び日本の経済活動の対象としての、ベトナム、インドシナがクローズ・アップされる時期がきている。1990年代の始まりにあたって、日本とベトナムとの間の人間的な関係が発展することを願い、この「ベトナム特集」の前書きとしたいと思う。（編集部）

ベトナムの歴史

ジャーナリスト 加藤 則 夫

はじめに — 2つの特徴

最近、「儒教文化圏」「漢字文化圏」という文字をよく目にする。日本を先頭に、アジアNIESの経済発展ぶりが注目される中で、脚光をあびてきたキーワードである。確かに日本をはじめ、韓国・台湾・シンガポール・香港は儒教や漢字文化に浴してきた国々である。ベトナムも、これらの国々と共通した文化圏に属する。

意外に知られていないが、世界広しといえども、「はし(箸)」を使う民族はわずか4つしかない。中国・日本・朝鮮そしてベトナムである。「はし」の使用も同じ儒教文化圏の特徴の一つにすぎない。その他の共通点は、枚挙にいとまがない。伝統行事の旧正月や中秋節、身分制度の士農工商、官吏登用制度の科举制(この制度は日本は含まれない)etc。遊びの将棋も共通である。日本のルールだけやや違っているが(相手の取駒を何度も使えるなど)、基本は共通なので、言葉は違っても将棋で立派にコミュニケーション可能と言える。

もちろん、こうした文化的習俗の共通点は、他方で、東アジアの超大国中国の影響を絶えず強いられたことを意味する。ベトナムはかつて、10世紀以上にわたって中国の支配下にあった。今世紀の民族解放闘争においても、中国は欠くことのできない存在であった。

このような中国との深いかかわりを、ベトナム史の第一の特徴とすると、もう一つの極立った点は「南進」と呼ばれるものである。ベトナム人は「北のランソンから南のカマウまで」という成句を多用する。これは、中国国境の山岳地帯から南シナ海に突き出たカマウ岬まで、ベトナムは南北一つであることを強調したフレーズである。しかし、ベトナムが現在のような南北1600キロに及ぶ版図を占めるようになったのは、わずかに200年ほど前のことにすぎない。北の大国中国との確執に忙殺されたベトナムは、他方で絶えず南へ、南へと勢力を拡大していった民族であった。中国からの独立と南進の開始は、ともに10世紀のことである。

南進による最初の抗争は、海のシルクロードとよ

ばれる海上通商によって、中部一帯に隆盛を誇ったインド系のチャンパとの間におきた。このチャンパを事実上の支配下におさめたのは15世紀後半である。さらに南下し、メコンデルタに住むカンボジア人勢力を駆逐し、ほぼ現在の領土を支配したのは、18世紀末のことである。

このように、ベトナムの歴史は、北からの圧力を常時受けながら、南へダイナミックに勢力を伸長していった歴史と言える。

封建時代 — 日本とのかかわりを重ねて

ベトナム人の愛用句に「ベトナム4000年の歴史」という言葉がある。歴史の古さは、ベトナム人の誇りの一つである。もちろん、4000年前の歴史を正確にたどるのは不可能だが、ベトナム人が北部紅河デルタの稲作とともに発展してきたのはまちがいない。紅河は、南部のメコン川に比べて治水の大変むずかしい河と言われている。この荒々しい性格の河との絶えまない闘いが、ベトナム民族を鍛えたと言う。現在でも、紅河沿いには等間隔で無数の監視所が置かれており、洪水対策は最重要施策の一つと云ってよい。いずれにしても、紅河デルタ一帯の稲作による人口増加が、絶えず南進を図る一つのバネになったと言える。

ベトナムが中国の歴史書に登場するのは、漢の武帝時代からである。紀元前111年、北部ベトナムの地が中国の郡として編入される。これ以後、千年にわたって、ベトナムは中国の支配下に入る。

一方、四分五裂を重ねていた中国が7世紀に入って隋・唐によって統一されると、ベトナムを含めた東アジア世界は一変する。まず地続きの朝鮮は、三国分立時代から、唐のあと押しによって新羅の統一が成る。海をへだてた日本ですら、大化改新の断行によって、中国式律令国家が生れた。他方、ベトナムの場合、ハノイに安南都護府がおかれることになった。

ベトナムの中国からの独立は、10世紀まで待たねばならない。しかし、千年にわたる中国従属時代においても、数々の反乱があった。その中で、ベトナム



現在も残るホイアンの日本風建物（ピース・ポート提供）
てしまう。

ム人が最も人口に膾炙しているのは、西暦40年のチュン姉妹の反乱である。豪族の娘であるチュン・チャック、チュン・ニに率いられた反乱は北部全土に広がり、中国は3万余の援軍でかろうじて鎮圧した。チュン姉妹は、自ら川に身を投じてその生涯を閉じたと言う。この非業の死とあいまって、チュン姉妹に対するベトナム人の敬慕の念は、今もきわめて深い。ハノイ、ホーチミン市などの中心通りや学校に冠せられた名前から、深い敬愛の思いの一端がうかがえる。

939年、幾多の反乱の後、ついにベトナムは中国から独立をする。これ以後、一時的に中国の大軍による支配を許したことはあっても、フランスの侵略まで、ベトナムは独立を維持する。^註とは言っても、主な歴代中国王朝は必ずベトナムに大軍をさしむけてきた。宋・元・明・清すべてそうである。そのたびに民族的英雄が登場し、あるいは独立を回復し、あるいは独立を守る。先にあげたチュン姉妹と同様、こうした民族的英雄の名は、今も主な都市の中心通りに見られる。

その一人がチャン・フン・ダオ將軍である。チャン・フン・ダオは蒙古（元）の襲来を撃退した名將で、民族的英雄の名に恥じない勲功をあげた。13世紀の末、蒙古軍は2度にわたって日本を侵寇しているが、ベトナムには3回侵略軍を派遣した。その時の撃退の方法が、今もベトナム人の自慢の程の一つである。

まずあらかじめ大きな杭を川底に打ち込む。満潮時に、わざと戦に敗れたふりをして蒙古の大船団を上流にさそいこむ。干潮時に逆襲する。400余艘の大軍も、杭にはばまれ動きがとれなくなって壊滅し

封建時代、蒙古襲来と共に日本とのかかわりが深いのは、ベトナム中部に今も残る日本人町である。ベトナム戦争当時、軍都として名を馳せたダナンから車で約一時間の所にホイアンという町がある。そのホイアンの中心に今も日本風の家屋が左右に並ぶ通りがある。初めてその通りに足を踏み込むと、一瞬わが目を疑う。それほど完璧な形で、かつての日本人町の雰囲気が濃厚に残されている。

鎖国に至るまで活発な海外交易を行った日本は、東南アジア各地に日本人町を作った。しかし、今もその原型をとどめているのは、ホイアンだけと言ってよい。ホイアン一帯のベトナム中部は、インド系の通商国家チャンパの時代から、東西交易の要路であった。いわば、代々ベトナムの中で最も外に開かれた場所の一つである。このホイアンの地で、3月末日本の研究者も参加して国際シンポジウムが開かれたが、今、外に向けて開放政策に本腰を入れるベトナムにとって、ホイアンでの開催は時宜に合ったものと言えるであろう。

註 フランス侵略までの主な王朝を列記すると以下の通りである。

リー		レ	
李	1009-1225	黎	1428-1789
チャン		鄭	
陳	1225-1400	阮	1802-1945

フランス植民地時代

東アジア世界を震撼させたアヘン戦争は1840年の事件である。西洋列強の一つ、フランスのベトナム侵略開始は1858年であった。侵略の口実は、時の阮王朝によるカトリック宣教師弾圧である。以後、阮王朝はフランス軍の前に次々と屈服を重ね領土を

失う。

20世紀に入って、フランスはカンボジアとラオスを含めインドシナ植民地統治を確立する。もちろん、その間ベトナム人の抵抗も切れ目なく続いた。王の臣下の抵抗から始まって、儒者の乱、農民一揆、民族ブルジョワジーの蜂起と続き、次第に民族抵抗運動のイニシアチブは、共産主義者の手に握られていく。

ここで、ベトナムの民族運動の中で日本と因縁の深い出来事をいくつか紹介したい。周知のように、日露戦争(1904-05)における日本の勝利は、西洋支配にあえぐアジアの人々に強い衝激をあたえた。ベトナムも例外ではない。

日露戦争と言えば、ベトナムとの関わりで一つのエピソードがある。ロシアのバルチック艦隊が、日本に向けて北上中、最後の休養地としたのがカムラン湾だったと言われている。当時は、閑散とした漁村にすぎなかったと言う。現在、極東有数の大軍事基地になっているのと比べると、まさに隔世の感がある。

さて話を元に戻すと、日本の日露戦争勝利の刺激を受けて、ベトナムでは日本への留学運動が起きた。これを東遊運動と言う。一時その数は、200人を超えるほどであった。しかし、この運動はフランスの要請をうけた日本政府の追放令で、あえなく数年でついでてしまう。

同時期に、ハノイに日本の慶応義塾トンにならった東京義塾キンギョアトウツが創立される。この私学校も、東遊運動と同じく民族独立をめざす活動家によるもので、教育活動を通じて運動の高揚を図った。しかし、この運動も9カ月の短命で終わってしまう。

ベトナム民族運動の転機となったのは1930年である。この年、インドシナ共産党が誕生する。共産党は、失敗はしたものの中において大農民蜂起を指導し、その存在を誇示した。一方、同じ年、民族ブルジョワジーの中の最大政党国民党が蜂起に失敗し、党首の逮捕など壊滅的打撃を受けた。以後、ベトナムの民族運動は共産党の主導の下に行われることになる。

独立まで — 日本の侵略から8月革命へ

かつての太平洋戦争がアジアへの「侵略」か「進出」かをめぐって、日本の歴史教科書が議論をよんだことは、まだ記憶に新しい。いずれにしても、日本が加害者であったことは、率直に認めるべきであろう。

ただ、もう一つの側面として、日本の侵略によって、アジアの植民地における政治的力関係が大きく変化したことも否定できないであろう。ベトナムの独立は、この力関係の変化を機敏に読みとり、更には外部権力の空白の一瞬をあざやかに把えて達成されたものである。

日本のベトナム進駐は、太平洋戦争の前年の1940年である。つまり、東南アジアへの戦線拡大に対する準備としての侵略であった。太平洋戦争期間を通じて、この前線への後方補給基地としての役割は変らなかった。補給優先のため、ベトナムを支配していたフランスとの衝突はできるだけ回避し、共同で統治することをめざした。ベトナムは、この状態を「二つの首かせ」と呼ぶ。

こうした日本の政策のため、太平洋戦争中、ベトナムが直接の戦場になることはなかった。日本が直接統治に乗り出すのは、敗戦の年1945年の3月である。日本の敗戦を見越して、フランス側が不穏な動きに出る可能性がでてきたからである。フランスを打倒した日本は、阮王朝の最後の皇帝バオダイを首班とするかいらい政府を作り、形だけの独立を認めた。

日本が敗戦した時のベトナムは、まさに権力の空白状態であった。日本軍は、言わば放心状態であった。フランス兵は、監獄に閉じ込められたままであった。ポツダム会議によって、日本軍の武装解除の任に当ることになったのは、北部が中国(蒋介石軍)、南部がイギリスであったが、彼らがベトナムに到着するのは9月に入ってからである。

共産党に率いられたベトミンは、その一瞬を把えた。北から南へ、ハノイ(8月19日)、フエ(8月23日)、サイゴン(8月25日)をいっきに奪取したのである。そして、9月2日、ホーチミンが独立宣言を読みあげて、ベトナムは独立する。ホーチミンの卓抜な指導性、あるいはベトナムに共産党が大多数のベトナム人の心を把えた理由、こうした問題は興味つきないテーマだが、この稿の範囲を超える。

最後に一言だけつけ加えたい事は、敗戦の年、ベトナム北部で発生した大量餓死者の事実である。ベトナムの発表では、200万人と言われている。これは、太平洋戦争下のアジアにおいて、最大規模の犠牲者であった。もちろん、日本軍が直接手を下した訳ではないが、日本が引き起した戦争下の出来事である。いつまでも記憶にとどめておくべきであろう。

我が青春の地ベトナム—戦争の頃、そして今

石川文洋氏は1964年から1986年にかけて、フリーカメラマンとして、ベトナムに滞在。最前線への従軍などを通してベトナム戦争を写した写真は、大きな反響を呼び、日本写真家協会賞、日本雑誌写真記者協会賞などを受賞しました。終戦後もベトナムにかかわり続け、幾度も足を運んでいます。今回の記事は、1987年3月、中国国境のランソンからメコン・デルタ最南端のミンハイ省までの紀行をまとめた『ベトナムロード』（平凡社刊）のなかの文章を中心に、最近の感懷を付け加えたものです（A.G.）。

高校の同級生より格段に鮮明な兵士たちの面影

「少しずつ人生の方向も見えはじめた」（同書“はじめに”より）という従軍記者生活は石川さんにとってどんなものだったのでしょうか？

「ベトナムに来て初めて従軍したのが、ビンディン省で作戦しているサイゴン政府の海兵隊だった。……当時私は26歳だった。そして27歳の誕生日を戦場で迎えた。……小隊長クラスの若い将校は、みんな私と同じくらいの年齢だった。……彼らとベトナムビールのバームイバーを飲んだり、小さな食堂にうどんを食べにいったりした。みんな親切で、とても気持ちの良い男たちばかりだった。解放戦線の容疑者を捕えて拷問したり、農家に火をつける時の彼らとはまるで別人のようだった。戦争は、ほんとうに人間を変えてしまうものなのだ。（中略）

日本での私の高校時代、長く一緒に過ごしながら、顔も名前も思い出せない同級生も多いのに、ベトナム海兵隊の兵士たちのことは、実に細かいところまで思い出される。やはり同じ世代の兵士と過ごしたベトナムでの強烈な青春の一時期が、脳裏に焼きついているのだろう」

「いつでもベトナムから離れていける立場の者にとってのサイゴンは面白かった。料理はうまいし、カチナ通りに並んでいるバーに行けば、美人もたくさんいた。砲声が響き、照明弾で明るくなった河畔のレストランで食事をする時、他の国では感じることでできない不思議な雰囲気を感じた。緊張感と退廃とが混然としているような街だった。

従軍から帰って、バーへ酒を飲みに行くと、ベト

ナム人を殺している側のアメリカ兵たちも、同じバーでベトナム女性と戯れている。戦場の死傷した肉親を前にして、農婦が嘆いている風景が目につく。その農婦と同じくらいの年齢の女性がバーで働いている。（中略）時々、東京へ帰っても、一カ月もすると退屈してベトナムへ戻りたくなった」

「ベトナム戦争を取材中、私が解放戦線と北ベトナムを支持していたのは、ベトナムにおけるアメリカの政策と、アメリカ軍の存在を否定していたからである。外国の軍隊が自分の国にいることは、生理的にきらいである。これは私の故郷である沖縄に米軍基地があることが、とても受け入れられないという気持ちと無縁ではない」

「ハノイに初めて入った時の感激も、生涯忘れることができません。……大勢の人や自動車の騒音につつまれたサイゴンとは対照的に、ハノイはびっくりするほど静かな街でした。北爆下の農村は、ちょうど収穫の季節で、農婦たちが黄金色のモミを干している姿があちこちで見られ、若い女性たちが泥にまみれて、水路の堤防を補修していました。“独立と自由ほど尊いものはない”というホー・チ・ミンの言葉の実現を願いながら、激しい爆撃の下で、国を守ろうとしている人々の姿に深い感動を受けました」

何重にも積み重なる侵略の爪あと

「（ヴィンリン地区の）ホーサーは1965年2月8日、ジョンソン大統領の北爆全面開始命令で、一番最初に攻撃された町である。2月8日約50機の戦闘爆撃機がきて、午後2時から4時半までの間に、すべてを破壊した。（その後も空爆や砲撃のため）73年に私たちが取材した時に、街に残っていたのは水道タンクの4本の柱だけだった。その時までヴィンリン地区に落とされた爆弾は約40万トン、人口7万の町に1人当たり7トン、1平方キロメートル当たり約600トン、そのほか、砲撃が70万発、1平方キロメートルに800発、ということだった。（中略）

（ヴィンリンを含む人口13万人の）ベンハイ県だけで、統一後、千人以上の人が不発弾で死亡し、現在でも毎月2、3名が死傷している。その多くは、畑や荒野に散在するボール爆弾（ひとつの爆弾から約

600個の野球ボール大の子爆弾が飛び散り、さらにその子爆弾から数百個のバチンコの玉大の鋼鉄球が飛び散る殺傷兵器)によるものだ」

この不発弾による被害は現在もベトナム全土の悩みの種で、貴重な人命を奪うだけでなく、復興への意欲を削いでいると言います。石川さん自身、1973年の取材では、不発弾の爆発による血塗れの女性を見、なおかつ4発のボール爆弾を発見しています。「ダナンとフエの間には約500メートルの高さのハイバン峠がある。峠にはフランス植民地時代のフランス軍の塹壕があり、これはベトナム戦争中、サイゴン政府軍も使用していた。当時、バスや自動車でも何度か峠を越えたことがあるが、自動小銃を持ったサイゴン政府軍の兵士が、時々バスを止めて、ベトコンは乗っていないか、と調べている風景を見た。いま、そのベトコンが、ベトナム正規軍となって、ハイバン峠の塹壕を使用している。……二組のアベックがそれぞれに記念写真を写しあっていた。時代の流れを感じる」

歴史の染みついた国土を石川さんは、このように描写しています。

「ベトナム侵略の目的をもって、ダナンに軍艦を入港させたのはフランスであった。1858年9月1日、12隻からなるフランス、スペインの連合艦隊がダナン港を占領した。……太平洋戦争での日本軍の仏印進駐時には、日本の軍艦もダナン港を利用した。そして、ベトナム戦争で米軍の本格的介入の戦闘部隊として、海兵隊が上陸したのもダナンだ」

JVCはベトナムで何をすれば良いのか？

そして、歴史がまた回転しました。石川さんが望んでいたように、ベトナム軍のカンボジアからの撤退が完了し、西側諸国の援助が届き始めようとしています。また、わたしたちJVCもベトナムでのプロジェクトを真剣に検討しています。日本は、そしてJVCは、戦乱で疲れ、難民流失で衰えた国で何をすればいいのでしょうか？ 1990年春の石川さんの気持ちをうかがってみました。

「ベトナムの経済は、今、最悪の状態にあると思います。昨年の12月にホー・チ・ミン市に行きましたが、街の様子は、私が住んでいた25年前とあまり変わっていませんでした。それだけに、なつかしさは感じられましたが、別の考え方をすれば、25年間、発展していないと言えます。隣の国タイのバンコクが年々大きく変化しているのとは対照的な風景です。

石川文洋氏



ベトナムの経済がよくない原因はいくつかあります。そのひとつは、フランスの植民地時代の第一次インドシナ戦争、続いてアメリカとの戦争と、30年も続いた後遺症の深さです。人的、物的、精神的とこの間の破壊は私たちの想像を超えています。もうひとつは、ベトナム共産党の経済への対応のまずさもあります。経済を高めるというのはひとつの才能だと思います。彼らはアメリカに勝つぐらい戦争にはがんばったが、経済には素人だったと思います。

しかし、経済発展を妨げている一番の原因は日本を含めた西側のベトナムへの非協力です。ベトナムのカンボジア侵攻を理由に、日本政府は援助を凍結しています。しかしベトナム軍が撤退後も凍結がとかれていません。日本政府がアメリカ、中国をうかがう政策を取っているからです。こういった日本の態度を見てみると、長い戦争で苦しんだベトナム、カンボジアの人々をどうして助けてあげようという気持ちを持てないかと、情けなくなります。

さて、JVCの活動ですが、カンボジアで井戸を掘っているところを見たことがあります。その時に、現地の人々は大変喜んでいました。それは、現地の人々が本当に望んでいることをしたからです。以前、日本政府のフィリピンのマルコス政権への援助が一般民衆を助けることができなかったのはよく知られています。

まず、ベトナムでは人々が本当に望んでいるものは何かということ、現地で時間をかけて調査することが一番大切だと思います。カンボジアでのワークショップでは自動車の修理技術などをカンボジア人が習い、それがカンボジアに還元されたように、長い目で見て、ベトナムの人々の役に立つような支援をしてもらえたら良いと思います。それが何であるのか、残念ながら、私には分かりません。どうぞよろしくお願いいたします」

『戦後』の終わらない国から

熊岡路矢

今回、1月2日から9日にかけてホーチミン市（旧サイゴン）の、特にスラム地区の現状と基礎教育、社会福祉、技能訓練、医療保健などについて訪問調査を実施する機会を得た。

おおざっぱではあるが、経済的には次の3点が印象的であった。まず長期間にわたった民族解放戦争時の人的物的被災、および、特に「ベトナム軍のカンボジア進攻（1978年末から）」以後の西側国際社会によるベトナムに対する「経済封鎖」、そして国内要因、経済政策の誤りなどに起因する、累積した貧困の広さと深さ。街路に居住せざるをえない、大人や幼い兄弟の姿から、失業や低賃金、家庭の崩壊が浮かび上がる。

2点目として、にもかかわらず、様々な商業活動などにもなう、屋台、自転車、人力車、オートバイ、車が行きかう市街の交通は、大変なエネルギーを感じさせた。円やドルに換算すれば、ひとつずつの行為は小さな価値、小さな利益と表現されるのかも知れないが、その活動の総和は人口の稠密度とも相乗して、大きな勢いとなっている。

3点目に、1990年が「ベトナム観光年」として決められたこととも関連するが、ここ1、2年、ホテル、レストラン、カフェを中心に、「観光」産業が盛り上がり、建設あるいは改装ラッシュが続いている。在外ベトナム人（「ベト僑」）を含む、海外からの投資と、各ホテルが独立採算に移行したこと、ひろく私



ホーチミン市サイゴン河上のフローティングホテル
宿泊費が高すぎて泊り客が少ない

企業形態の経営が積極的に認められてきたことによっても、この「観光ブーム」は支えられている。

昨年12月にオープンした「フローティング・ホテル」（一泊100～150ドル以上）は、このブームの象徴として、昼夜を問わず、サイゴン河上にその豪華な姿を誇示している。なお同ホテルは日本資本の協力によって実現した。

現実に私が訪れたのは、上記の観光の華やかさ軽さと、いわば対極の世界であった。訪問地区は主に第8区のスラム地域と、ビン・チャン郡の2カ所。第8区は第4区とともに、運河にはさまれた、主にスラム地域によって構成される、ホーチミン市内の最も貧しい区である。

第8区が運営するヒー・ボン（希望）学校は、障害児のための学校で、昨年11月16日に開校した。最終的には様々な障害の子供たちを受け入れるよう企画されているが、現状では耳の不自由な子供たち21人を受け入れている。同地区では該当の子供の総数は50人だが、うち23人は家庭の経済事情で通えず、6人は逆に多少の余裕があり、他の区の授業料が高く、また設備のより良い学校に通っている。

聴力障害児の為の会話訓練を専門とする、チャン・チ・ゴイさんは、自身8年間の特別教育を受け、15年間以上の実践経験をもつベテランの先生である。特別な設備や器具もないので、水まき用のホースとじょうごを組み合わせた、会話用の器具を作り、生徒と対面し、口をあわせ、指先を互いの喉にあてて、会話訓練をいねいに優しく続けていた。時として子供とともに鏡に向かって、口の開け方や舌の位置を教えている。

設備が貧しいだけに、ゴイ先生をはじめ7人のスタッフ（全員が女性）の、地味ではあるが大事な教育活動は、創意と工夫に満ちていて感動的であった。しかも先生の給料は、月に3万～4万ドン（7～9ドル位）と安く、ほぼ全員が副業を余儀なくされている。

一般の小中学校の先生もまた、教育環境、設備の貧しさと、自身の生活の苦しさで悩み、意欲を失ったり、転職を考えたりしている。第8区の26の小学

ホーチミン市第8区ヒー・ボン(希望)特別学校
(耳の不自由な子供のための学校) 食事時間



校、中学校があるが、過去一年間で総計3200人のスタッフ(うち70%が教師)のうち300人が生活難で転職していった。

小学校では、13地区のチャン・グエン・ハン小学校、15地区のレ・ライ小中学校を訪れた。授業は通常どこでも、3シフト(午前、午後、夜)で行われ、前者では午前10クラス400人、午後10クラス450人、夜間5クラス60人の子供たちが通っている。夜に来る子供たちは、「ストリート・チルドレン」で昼間は働かねばならない子供たち。レ・ライ小中学校では、午前中1300人の小学生を30人の先生で教え、午後770人の中学生を36人の先生が教える。ここも夜のクラスがあり、50人の子供たちが集まる。こちらの先生の給料も3万～4万ドンである。

夜間の子供の出席率は平均すれば50%ほどであるが、その日の出来事次第で大きく変わり一定しないとの事。昼のクラスでも、家庭の事情で仕事を手伝うため、また栄養状態、健康状態の悪い子供たちが多いため15%前後の欠席率が報告されている。中には昼間から、ビリヤードなどのゲームにふける子も街角に見た。

なお街でも学校でも、外国語教育としては、英語が重点となっている。英語教育は、中学校1年生から始まり、レ・ライ学校の場合、週4回で合計3時間と45分間の授業である。

第8区には唯一職業訓練校があり、自動車エンジン、運転、電気、裁縫、大工、テーラー、塗装、木工の種目があり、100名ほどの訓練生が学んでいる。設備は整っていない。オートバイのエンジンのクラスでは、技術大学(1984年卒業)で学んだ、グエン・ゴク・アン先生が教えていた。訓練生の一人、グエン・ヴァン・ズックさん(21歳)は、昨年9月末にカンボジアから帰還した元ベトナム兵。86年から89年

まで3年間、カンボジアのバットアンバン県で駐屯していたとのこと。

ホーチミン市郊外のビン・チャン郡病院など、病院、保健所、産院も見えて歩いたが、ここでも設備や器具の欠如を訴えられた。歯科の治療の椅子は、理髪店の中古が使われ、照明には自動車の前照灯が使われていた。

訪問した診療所・保健所・産院では、診断治療、予防注射・免疫ワクチンの普及、出産、産前産後のケアのほかに、ベトナム政府の「二人っ子」政策を反映して、強力な「家族計画」活動が実施されている。女性へのIUD、男性のパイプカット、その他の避妊作戦も、一応市街部では成功しているようである。しかし労働力が求められる農村部では、この「二人っ子」政策は歓迎されず、無視される傾向にある。

今回、基礎教育、社会福祉、医療保健の現場を見て、劣悪な環境の中で、社会のために地道に働きつづける先生、医師、看護婦、福祉ワーカーの活動を目の当たりにした。彼ら自身の生活が苦しい。これらの人々の仕事の公的な意義を正當に評価し、仕事の環境設備と生活費の両面で報われるようにしない限り、かなりの数の人が生活のために、私企業セクターへ流れることを止めることはできない。そしてその結果困るのは、子供たちだったり、患者さんだったりするわけである。

現在のベトナムの困窮度の厳しさと、その原因のかなりの部分が国際的な要因から生じていること、日本とベトナムおよび「ベトナム戦争」との歴史的なかわりを深く考えると、1990年のこの時点で、普通の人同士として、何かベトナムの人々を協力支援できることがあるのではないかと考え続けた旅であった。



レ・ライ小中学校 英語の授業のあとの遊び時間

『戦後』の終わらない国からの提案

熊 岡 路 矢

背景と状況：1975年、ベトナムは長期にわたった民族解放戦争に勝利し、念願の平和と南北統一への道に向かった。しかしこの戦後においても、ベトナム民衆の生活状態は改善されなかった。政府の経済政策の失敗など国内要因もあるが、全体としては、長年の戦争による被災の深さと、西側諸国による経済制裁／援助停止などの国際的要因によって、現在もベトナムの経済は、国民一人当たりの年間所得100ドル以下と推定される、「最貧国」の位置付けとなっている。

ベトナムは、私企業活動の奨励や外国企業の誘致をふくむ新経済政策の浸透とともに、一部「観光」や外国企業との合併にかかわる部分、海外のベトナム人からの送金を受けられる層が、多少経済的に潤って見える反面、社会の大部分を構成する農村の人人、町の普通の人々は、極貧に近い耐乏生活を余儀なくされている。その中で、基礎教育、社会福祉、医療保健、職業訓練などを担う公務員たちは、社会の大事な役割を担っているにもかかわらず、活動の物的環境が貧しいだけでなく、みずからの生活も給料ではまかなえない環境の中で苦闘している。

ベトナム全体の戦争被災と貧窮度の状態によりさまざまな地域でのさまざまな協力活動が考えられるが、今回ホーチミン市で一番貧しいということで案内された、第8区とビン・チャン郡での協力活動を開始しつつ、今後の展開を図っていきたい。（「ベトナム訪問レポート」を参照して下さい）

目 的：

- (1) ヒー・ボン特別学校への支援を通じて、障害児

童のための社会訓練活動の環境改善に協力する。
またチャン・グエン・ハン小学校などの物的環境改善に協力することを通じて、特に夜間学級で行われている、昼間働く子供たちおよび家庭を失った子供たちに識字・基礎教育を支援する。

- (2) 病院、保健所および職業訓練所における設備改善に協力し、公的な活動を担う人々と受益者の双方を励まし、社会サービス活動能力の向上に貢献する。
- (3) 以上の目的を追求することを通して、スラム共同体および農村部での自律的組織的な自治能力向上を図る。

内 容：

- (1) ヒー・ボン特別学校
現地で入手できるもので聴覚訓練に必要な「ラボ」設備を作っていく。モデルとなる「ラボ」設備は既にホーチミン市の他区の特別学校にある。同地区の児童のうち、経済的事由などで通ってこれない23人のために、奨学金、ミニ・バスの提供を行う。
- (2) チャン・グエン・ハン小学校、レ・ライ小中学校の、壊れたまま放置されている教室を直し、13地区小学校の運河に沈みかけている一部校舎を陸地側に移し、再建補修する。
- (3) 第8区病院／保健所およびビン・チャン郡病院／保健所に対して、外科・歯科用設備改善に協力する。（この件に関しては、日本の医療保健専門家の訪問を実現し、現地で更に調査をすすめる予定）
- (4) 職業訓練所の、バイクなど機械修理（主に男性

発声訓練 ヒー・ボン特別学校



木曜日午後の英語の授業
レ・ライ小中学校



用)とミシン洋裁(主に女性用)の部門に対して、
工具、教材、ミシンの支援を行う。

活動地：ホーチミン市第8区およびビン・チャン郡

対象者：ヒー・ボン(希望)特別学校(聴覚障害児
童の訓練校)、チャン・グエン・ハン小学校、
レ・ライ小中学校、13地区小学校、第8区
病院、第8区職業訓練校、ビン・チャン郡
病院

期 間：1990年7月から1991年3月末

ベトナムは長期にわたる戦争の時代があったとはい
え、教師、医師、看護婦、技術者など人材養成
のシステムは確立しており、各分野の人材は豊か
であるといえる。外国人でなければできないこと、
教えられないことなどは、例えば大量の専門家・人
材が失われたカンボジアなどに比べると、少ないと
いえる。また長い間の植民地時代および外国の侵略
を受けた歴史をもつため、外国人に対してかなり警
戒心をもっていて、受け入れは一般にあまりよくない。
したがって特に最初の段階において、日本人の
専門家が現地で長期に滞在活動することは難しい、
と思われる。



ビン・チャン郡 郡病院の医師
歯科用のランプは中古の自動車前照灯

1990年度の予算(案)

この提案は、執行委員会での討議と承認を経て、
1990年6月のJVC総会で討議にかけ、承認が得ら
れた場合には、活動を7月以降から行う予定です。
したがって人件費なども9カ月として提案してあり
ます。

A. プログラム費用

「ラボ」設備製作設置	350,000円
奨学金(23人)	552,000
ミニ・バス	1,800,000
屋上の安全設備	150,000
教室の修理(ハン小学校)	230,000
教室の修理(レ・ライ小中学校)	290,000
校舎の移動(13地区小学校)	1,500,000
外科用機械(X2) [未定]	1,000,000
歯科用機械(X2) [未定]	1,000,000
工具、教材、ミシン	278,000
現地駐在員 人件費(9カ月)	2,250,000

Aの小計 9,400,000円

B. 東京オフィスでの経費 3,000,000円

A+B 12,400,000円

C. 以上の20%(運営費へ) 2,480,000円

D. 総合計(A+B+C) 14,880,000円

●ベトナム難民の帰還プログラムに関する調査

UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)との協力関
係による、難民帰還者を対象とした、職業訓練プ
ログラムの可能性を調査する。

参加者：星野、熊岡

1990年3月26日から4月4日(ハノイ 3月28日
から4月1日)まで



第8区職業訓練校

トゥーさんのこと

熊岡路矢

今回のホーチミン市訪問で通訳としてついてくれたトゥーさんは、きわめて知的なベトナムの現代女性でした。頭の回転が早く、母国語をべつにして5カ国語（英、仏、西、伊、露）に堪能で、更にドイツ語と日本語を独学中という、「一体この人の頭の中はどのようになっているのだろうか」と開けて調べて見たくなるような感じの人です。しかも3年前まで、音楽家（ピアニスト）としてベトナムおよびソ連において、ダン・タイ・ソンなどと共に、最高レベルの教育と訓練を受けていたとのこと。もっとも「絵画・デザインなどの視覚芸術と数学やスポーツはちょっと苦手」という率直な自己評価を聞いて、最初圧倒されたこちらでも「人間欠点はあるものだなあ」とつきあう上で少し気が楽になりましたが。

トゥーさんは生粋の「サイゴンっ子」で、生まれた年は1954年。いうまでもなく「ディエン・ビエン・フー」におけるフランス軍のベトナム軍に対する歴史的な敗北と、その結果としての、フランス撤退以後について話し合う「ジュネーブ国際会議」があった年です。1年後に全国総選挙を行うという前提で（ただしこの選挙は行われなかった）、ベトナムは17度線において南北に分断されました。ホーチミンを支持する人々は北へ、北の社会主義政権を嫌うカトリック教徒などは南へ移動しました。

彼女のお父さんは、文学者・詩人として既に民族解放闘争に参加していたので、トゥーさんをみごもっているお母さんをおいて、赤ちゃんの顔を一度も見ることなく、北へ移動して行きました。お母さんは音楽家（指揮者）として活動を続けていたのですが、4年後の1958年、トゥーさんを母親（トゥーさんからは祖母）に預けて、やはりハノイに向かいました。ですから彼女は写真以外では両親を知らず、幼い頃は祖母を母親と思い、大きくなってからは自分を両親ともに失った「みなしご」であると考えていたそうです。

おばあちゃんは気丈な女性で、経済的には厳しかったようですが、教育が大事と信じて、トゥーさんをフランス系の「マリー・キュリー女学校」に通学させながら、ピアノの勉強を続けさせました。彼女

の少女時代の「南ベトナム」において、1960年代から1970年代前半は、アメリカの影響が強く、そのせいか彼女はクラシック音楽への素養は別として、エルヴィス・プレスリー以降の「オールディーズ」が身についていて、鼻歌メドレーで歌えるほどよく知っています。

いよいよ1975年4月30日、歴史的な「サイゴン陥落」、北ベトナムおよび「南ベトナム解放戦線」で戦ってきた人々から言えば「サイゴン解放」の日が来ます。この日20歳の彼女は、両親・家族が勝者の側にいたはずですが、彼女の安全のためにその事は長い間隠されていたので、他の多くのサイゴン市民同様、北ベトナム軍の戦車団の入城とともに「何が起ころのだろうか」と非常に不安だったそうです。

「解放」の数日後、お父さんの戦友という人が家を訪ねてきて、お父さんが1968年の「テト攻勢」（解放側がベトナムの新年にしかけた大攻勢。米国大使館すら一時占拠される）以後行方不明であること。もし生きているとすれば、ベトナム南部の刑務所・収容所のどこかにいるはずということで、その友人とトゥーさんは、「南ベトナム政府」の悪名高かった政治犯収容所「虎の檻」＝コンダオ刑務所（南シナ海の孤島）をふくむ10以上の刑務所を、お父さ



トゥーさん（▶印）とベトナムを訪れたJVCスタッフ

んの写真を持って訪れ捜しまわりました。心身を壊され、障害者となった多くの収容者を目撃するものの、ついに求める人を捜し出すことが出来ませんでした。最終的にお父さんについては、1968年「テト攻勢」の作戦中に南部のどこかで倒れたという以上の情報はえられず、遺体・遺骨はもとより、亡くなった地域すら不明です。民族解放の英雄のひとりとして死んだお父さんの詩とエッセイの一部は、現在中学校の教科書に載っているそうです。

一方お母さんは1975年中にハノイからホーチミン市（旧サイゴン）にもどり、17年ぶりに母娘が再会し、一緒に暮らすことになりました。今家族約10名（戦争の傷痕を反映してか、大部分は伯母、叔母など女性）と大小5匹の犬が、1930年代からの古い3階建の家に暮らしています。ピアノや古い家具、盆栽や庭の草花が調和し、質素なたたずまいのなか、

落ち着いて美しい雰囲気をつくっています。おばさんは、厳しかった一生において多くの義務を果たし、今はテレビで中国やベトナムの時代劇を楽しむ毎日とか。お母さんはホーチミン市の音楽学院で若い指揮者養成のため働いています。トゥーさん自身は、1988年まで5年間モスクワの音楽院でピアニストとしての修練を積みながら、最終的には自らの音楽家としての才能に限界を感じ、好きな外国語の知識を生かせる外交・通訳の分野に転身しました。

民族の運命と個人の生涯が深く絡みあった、ベトナムの人々の劇的な生と死。居間の壁に飾られた、1953年の古くすこしばけた写真の中から、トゥーさんのお父さんは20代後半の年齢から決して老いることなく、今は平和で落ち着いたかのようにみえる、彼の家族を見守っています。多分ベトナムの他の数十万の家庭での情景と同じように。

報告会のお知らせ

カンボジアの10年とベトナムの近況についての報告会とベトナムでの活動（案）の提案を行います。興味のある方は是非ご参加下さい。

日 時：1990年5月18日（金） 午後6時半から9時まで

場 所：湯島総合センター ☎03(814)9241

報告内容：①カンボジア難民からカンボジア国内へ/ベトナムは今！

②1990年度ベトナムでの復興協力活動プログラム（案）提案説明

報告者：熊岡路矢（ゲスト・スピーカーを現在交渉中です）

活動者の募集

総会前の執行委員会および1990年6月10日（日）予定の1990年度総会での討議と承認を経てからですが、JVCではベトナムでの復興協力活動を開始する可能性があります。このプログラム（可能性）に関して、現地ベトナムで、あるいは日本国内での活動に興味のある人を広く公募したいと思います。応募される方は、略歴および活動に参加したい旨の「動機作文」（400字3枚程度）を同封して、JVC東京事務所までお申込み下さい。（5月20日位までお願いします。担当：熊岡）

またベトナムにかかわらず、はば広くJVCの海外・国内の活動のいずれかに参加する希望のある方々も、この機会にぜひ意志表示して下さい。

あてのなかった旅なのに…

八 尾 浩 幸

1989年2月1日、二度目のベトナムへの旅に出かけた。これといって理由になるほどの理由もない、あてのない旅の始まりだった。身内には誰も告げず、後でローンの返済だけがツケにまわってくるという、国外逃亡のような出だしだった。

ベトナム……、もちろんそこにはイメージできるものはある。戦争、植民地、枯葉剤、シャム双生児、南、明るさ、のんびりしたムード、暑さ等。一度目の旅で僕はベトナムを見ていたが、まだ今も残っている戦争の傷跡、貧しさ、ボロボロの服、ポートピープル、明るい子供たちの笑顔、小さな体の美しい女性たち、南の光線にそよそく風、街中にあるココナツのなっているヤシの木、これらの印象は決して軽く頭の中に残っているのではなかった。何かズシリとにぶいように重く、また心地よく残っていた。

しかし今回の旅に行く前は、これらのことをあまり深く考えていなかった。その時、自分にとって大事だったのは、自分の中にあるいろんな迷いや悩みから、ただ解放されることだけであった。南の光と風をいっぱいに浴びて、ただその風景の中に没入し、一体ここはどこで、自分は何者で、さてさてこれからどこに向かおうとしている人間なのか、それさえわからせてくれるような素材を自分に与えてくれるのならば、後はこちらでうまくやるよ、というぐらいに考えての旅であった。

そんなこんなベトナムは、えらく場面のとんでしまう旅だった。このベトナムでは、人がやっぱり生きていた。ある者は、経済の建て直しから国づくりに向かい、ある者はとにかく生活の保障されないところはごめんだとさっさと国外へ逃げ、そしてまたある者は、現状はクソつたれだがここは自分の生まれた地だから、今は何とか食いつないでいずれ良くなる時に備えようとし、そして現状がどうあろうが私はこの国が好きと、それなりに楽しみながらせっせと働きながら生きる者たちが、うじゃうじゃという感じでいた。

しかし何だろうか、この国の底知れぬ奥底から湧いてくるような力強さは。それも束になって初めて生みだされるような集団の力ではなく、一人一人の持つ力強さだ。あんたは死にたいのかどうか知らん



少年先鋒隊(ピオニール)の子供たちと筆者(後)

けど俺は生きるからね、というような凄味のある力強さだ。たとえ人を押しのけても、前へ前へ出ようとしていくようなたくましさを感じる力強さだ。理屈をこねれば、それもきっと誰でも説明ができる背景があることぐらい、僕もさすがにわかってはいるけれど、今はそんな分析はどうでもいいと思っている。

それより、実際その力を持ちえる人々がそこに存在していて、生きていくという事実が問題だ。脳みそにいっぱいシワがよっていきそうな青白い顔は、もう見飽きた。それより生きていくという実感を、胸いっぱい感じさせてくれるようなものが大切だ。これはエネルギーになる。しかも、どうやら人間もナマモノらしい、ということを感じさせてくれる。放っておけば腐りもするし発酵もするが、自ら生きようと思えば、人に何かしら与えることができるほどの生き物にもなれるらしい。

長い間、他国の支配を受け続け、やっと悲願の独立を達成したベトナムは、この15年ほどの間に確かに変わったが、経済的に発展し安定していくため、まさに国づくりを始めようとしている。本当のベトナムとしての自立はこれからなのだろう。それを見守りながら、結局僕は何かができるのだろうか。

旅を終え、今、サイゴン川の流れが愛しくてしかたがない。またあのほとりに座ってボカンと景色を静かに眺めることができる日を、今は楽しみにしている。不思議なものだと思う。あてのなかった旅のはずなのに……。

「我が社のベトナム戦争」

川 並 和 子

「おー、おー、朝も早から今日も我が社のベトナム戦争が始まったわい」と溜息をつく。

ベトナムの公団との合併で創られた旅行社の、私は初代日本人駐在員だった。私以外のスタッフは全てベトナム人である。細かく分けると、北緯17度線より北の出身者4名、南の出身者4名。

このオフィス、日替りで南北陣営各々から代表が出て論戦をくりひろげる、通称「我が社のベトナム戦争」がほとんど日課になっている。その日の「種」は、「ドライバーのヴェットさんのバックミラー盗難事件」であった。過日、ヴェットさんは、オフィスの近くにトヨタハイエースをとめたまま、オフィスのトイレに飛びこんだ。3分後、バックミラーは既に消えていた。急激に日本車を輸入しているベトナム。スペア部品が足りず、修理屋に持ちこめば高値で売れるため、車のパーツ盗難は日常茶飯事である。日頃、用心深いヴェットさんは、まさか自分の車からと涙をためて悔しがった。

さて問題は、新しいバックミラーの値段である。社用の車であったから、会社がその代金を負担した。口火をきったのは、南出身の会計担当者。(ヴェットさんは北出身)

「なぜ、もっと安い店で買わなかったの」

北組 「ちゃんと何軒もまわって安い店で買った」

南組 「兄からもっと安い店があると聞いた」

(彼らは驚くほど物の値段を記憶しており、どこが安いのかも知りつくしている人たちである。)

北組 「ここ数日でまた値段が上がったんだ」

南組 「嘘の領収書を書いてもらって、おつりをごまかしたんじゃないの」

北組 「何をいうんだ」—— といった大声でのやりとりが延々と続く。ころあいをみはからって、私の出番である。「仕事でーす」と彼らに負けぬ大声で叫ぶのだ。

この戦争、いくら火種が変わっても、各々の言いたいことはひとつだけ。「北出身者には、ビジネスというものがわかっていない。ただ個人の利益を優先させることばかり」と言う南組。「南出身者は、国家建設のために奉仕して働こうという意気がなく、自分の金もうけだけを考えている」という北組。要

するに南組は「経済観念」を、北組は「政治思想」を武器に、「自分たちの利益ばかり考えるな」とお互いをたたきあっているのだが——。

後日、盗難に備え番犬を飼うことになった。オフィスから買ったばかりの扇風機が、深夜に盗まれたためである。私は即刻、市場で犬を買おうと主張したのだが、なんと8人が一団となって、今犬を買うと縁起が悪いので、来月の頭にしようと言い張る。こんな点では、一致をみるらしい。

また後日、この犬が病死してしまった。(皆の主張した縁起のいい日に買ったのに!) 同同日、大切にしていた鳩が全て逃げてしまった。20代から40、50代までのスタッフ全員がまたもや一団となって、暗い顔になり働こうとしない。「ミミ(犬の名)がかわいそうだった。不吉だ。私たちの会社がうまくいかない印ではないだろうか」と、涙を流し皆でなぐさめあっている。

丁々発止、何かと言えばものすごいパワーで論戦し、ちょっと油断すると人の目をごまかして利益を得ようとするしたたかな面と、驚くほど純真で心優しい面と、およそ両立しないようなキャラクターを自然に合わせもっているのが、ベトナム人なのかもしれない。

民族の歴史をふり返ると「したたかさ」を身につけざるを得なかったのだろうな——と頭ではわかっていても、現実には日々彼らと接していると私の心はアップダウンをくり返す。「ああ、やっぱり信頼できる人たちだ」と思った翌日、「うんにゃ、やっぱり信頼できねえ」という具合に。

しかし、実はベトナム人のこの不可思議なキャラクターこそ、私がベトナムの中で最も魅かれるところである。



(左から2番目が筆者)
スタッフと食事会

エチオピアプロジェクトの今後

林 達 雄



青ナイル流域の被災地

100万人の犠牲者を出したといわれる1984年の大干ばつと同規模の飢饉が、今エチオピアに再来しつつある。ところが今回は内戦の渦中にあるため、救援活動は遅滞し、JVCも戦時下にあるウォロ州西部の被災地から昨年11月に撤退し、首都アディスアベバで待機している。エチオピア問題にNGOとして今後どのように関わっていったらよいのか？ 3月半ばから3週間、スーダン、アディスアベバ両サイドを調査した。

1) スーダン側からの救援活動

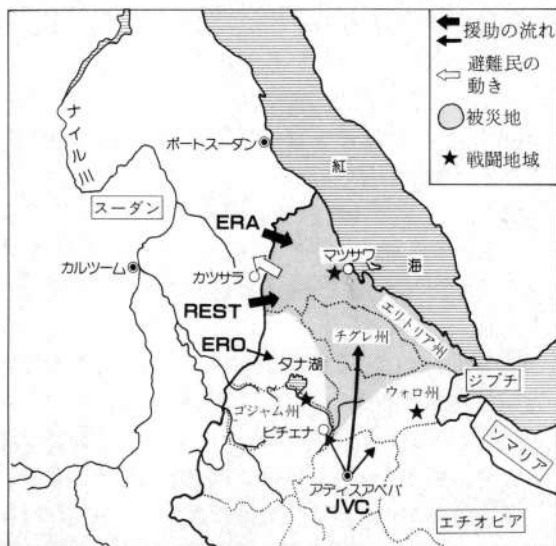
2月22日、日本からの調査団一行は2つのナイル川の合流する首都カルツームの空港に降りる。猛暑を迎える直前の砂塵舞う季節である。旧市街オムドゥラマンは1988年の大洪水ではほぼ全壊し、今だに盛土にトタン張りのバラックが並んでいる。「この高さまで水が来たんだ」流されずに残った鉄製の扉につけられた印を、子供たちが得意そうに見せてくれる。いうまでもなくこの洪水はエチオピアを水源とする青ナイルの増水による。森林伐採のために丸裸となり、保水力を失ったエチオピア高原に降った雨は表土を削り、激流となって川下のスーダン、エジプトへと下る。下流の災害（洪水）は、同時に沃土と繁栄をもたらしてきた。上流の災害（干ばつ）は、今また人々の命を奪いつつある。

スーダンには現在約70万人のエチオピア人が生活している。そのうち35万人が難民キャンプで暮らし、残りは主に都市で暮らしている。私たちはカルツームに住むエチオピア人のうち10数名と話ができた。1カ月前アディスから危険を冒して逃げて来たものの、物価は高い仕事もないと嘆く元政府軍兵士。援助団体の世話を受けながら、愚痴を言い合う人々もいる。その一方で飢えつつある同胞たちを何とか救おうと、それぞれの解放戦線と結んで救援団体を組織している人々もいるし、欧州のNGOのスタッフとなって働いている元気者たちもいる。

エリトリアの救援に当たるERAやチグレを対象にしたRESTが前者の代表格だ。欧州やカナダにもオフィスを持ち、多くのNGOから支援を受けている。彼らはポートスーダンからコンボイを組み、戦火の

合間をぬって、夜間国境を越えて食糧を被災地へと運ぶ。最悪の被災地までは、かなりの距離があるため容易ではない。またチグレでは、同州内の食糧に余剰のある地域から買付けを行っている。そのほかにウォロ、ゴンダール、ゴジャムを対象にするEROやオロモ族を支援するORA等があるが、特にEROなどは前二者とは比較にならぬ程小さく、夫婦の手内職のような感じであった。RESTの広報担当の26歳の女性は、アディスの国営放送局でチグレ語ラジオ放送のアナウンサーをやっていたという。事実に対する情報を流すことを強要されたため、3年前ゴンダール州を徒歩で抜け、スーダンに出てきたそうだ。明日アディスに行くと私が言うと、RESTの名を決して口にしないようにと、心配そうに手を握りしめてきた。

それぞれのグループのエチオピア人たちは、政治的見解は若干異にするが、飢饉に対する見解は同一で「大量移民を起こさぬように」である。飢えが極まればスーダンに向けての移動が始まるが、これは弱者切捨て、多くの人の死を意味する。国境への大量新難民の到来＝カタストロフィなのである。カタストロフィは2、3カ月に迫ってきたと口ぐちに語る。



スーダン側から救援活動を行う団体

エチオピア人による救援組織

REST チグレ救援協会

ERA エリトリア救援協会

ORA オロモ救援協会

ERO エチオピア救援協会

RESTやERAを支援する欧米のNGOs

SCF Save the Children Fund

MSF 国境なき医療団 OXFAM. その他多数

アディスアベバ側から救援活動を行う団体

JRP Joint Relief Partnership

(キリスト教系NGOの集合体)

RRC エチオピア救援復興委員会

WFP 世界食糧計画

OXFAM, SCFを初めとするNGOsはエチオピア内の実働を彼らにまかせ、自分たちはもっぱら資金援助を行い、時折マスコミを引き連れてモニターに入っている。

2) ゴジャム(青ナイル上流地域)へ

JVC新プロジェクト

調査の結果、スーダン側から特にチグレ、エリトリアの両州への救援活動がかなり組織的に行われているのがわかった。それに対してアディス側からはどうだろう。数十のNGOのほとんどが、北部への救援の道が開くことを待っている。

JVCではスーダン側からもアディス側からも、協力の手の入っていない干ばつ被災地、ゴジャム州西部の調査を3月5日開始した。ゴジャムは周囲900kmを青ナイルに囲まれた州で、全体的には肥沃でエチオピア人の主食テフの産地である。だが青ナイル峡谷に面した低地斜面は、浸食が進み、土地は痩せ、周期的な干ばつの被害を受けやすい。

私たちはアディスから北西265km地点にある国道沿いの町ビチェナから尾根づたいに25km入って、テーブル台地の端に立った。そこからのナイルの眺めは、水量こそ少ないが、スーダンで見たものよりずっと雄大で、人を寄せつけぬ厳しさがある。下りとはともかく、帰路の上りを考えると覚悟がいるのだ。標高にして600m程下ったゴーバスウハ村で村人たちの話を聞く。昨年大雨季の雨不足のためテフはほとんど収穫されず、ソルガムのみがわずかにとれた。また今年に入ってから降った雨のためにいなどが発生し、被害が増大している。今は山羊を売って

食いつないでいるが、村を出て西へ移動せざるをえない。最近食べるもののなくなった母子が村を去って行った。水汲み用の素焼の壺を焼いている女性に家の中を見せてもらうが、囲炉裏と粉挽き台があるだけで、がらんとしている。食べ物がある形跡がない。いまだに乳をしゃぶる3歳の子を抱き、そのほかに4人の子供がいるというのに、この26歳の母親の笑顔は屈託がない。こんな出会いがあるからこの仕事はやめられない。こんな人の力になれないかと考えてしまう。

この付近の水場を調べると1カ所しかない。かなり深い泉で大きな水壺を満たすのが容易ではない。また家畜も飲みに来るので、糞がごろごろしていて衛生的とは言い難い。台地の上の村も水には困っているようだ。昨日見た光景だが、道のわきで10歳ぐらいの子供がアルミ製の鍋で穴を掘っている。灰色の粘土をかき出しては5歳ぐらいの弟に渡し、捨ててもらっている。(次ページの写真参照)どのくらい時間がかかったのか分からないが、2m程の深さになると、穴の底からじわじわと水が湧いてくる。この水が溜るのを待って、母親が汲みに来る。ナイル流域にありながら、なぜ水に困るのか不思議に思われるかもしれない。青ナイルは確かに近くを流れているが、峡谷の一番底を流れているため利用できないのである。

この調査の結果JVCは、ゴジャム西部で緊急救援活動を開始することを決定した。食糧配布、衛生的な水場の確保と母子に対する保健栄養教育である。いままでウォロ州マーシャ村のプロジェクトで活動してきたスタッフがゴジャムに集結し、最終調査を行っている。食糧が入手でき次第4月には本格的な活動が始まる。

おわりに

国家という枠組みに捉えられた内戦はあまりにも周囲の国々の利権にふりまわされやすく、たとえ人民のために始まったにせよ、結局は人々の生命、生活は後回しにされてゆくようである。こうした問題に国家間組織はほとんど無力であり、国家を超えた存在であるNGOのみが可能性を秘めている。エチオピア問題に関わるすべてのNGOが、個々バラバラに人道主義を唱えてばかりいないで、一同に会して具体的な方策を練れば、内戦を調停してゆくことすら可能ではないだろうか。これは具体的な救援活動とともに私たちに課せられた宿題である。

エチオピアで見たこと

寿 賀 一 仁

私は決して最悪の状態に出会ったわけではない。それは国境の難民キャンプでもゴジャム東部の村でも同じだ。人々の表情は明るく健康で、衣服も食糧もまだ持っていた。しかし彼らの姿には、「あの写真」が常に二重映しになっていた。日本でいやというほど見てきた「あの写真」が。

今回の調査はある意味で、自分の想像力を試される旅であったといえる。十数時間のフライトの末、初めて来たアディス・アベバの街は、小雨の中、緑に包まれていた。市場には穀物や野菜、果物があふれていた。「これがあのエチオピアか」正直な私の感想である。

砂漠の中、9時間のドライブの末、初めて訪れた難民キャンプ。きれいに並んだ土壁の家々とテント。整った病院と市場。はしゃぎ回る子供たち。「これがあの難民キャンプか」

険しい山道を2時間下ってたどり着いたテーブル台地下の村。緑がある。水場がある。黒々とした肥えた土の畑。家の前を歩き回る元気な家畜。「これがあのエチオピアか」

それでも人々は、はっきりと感じていた。「あの写真」の世界を。

難民キャンプで、ゴジャムの村で。難民となった彼らが、村の人々が。そして我々と同じNGOの人間が、2カ月後か、それとも3カ月後か。

激しくなる一方の内戦のため、エチオピア北部の情報は、なかなか入ってこない。しかしそれ故にこそ、はっきりと感じていた。silent drought silent starvation (静かなる干ばつ、静かなる飢餓)を。



水を求めて土を掘る

エリトリアやチグレでは、昨年の干ばつのため400万人をこえる人々が、飢餓の危機に瀕しており、その規模は1984年・85年を上回るといわれている。しかしながら内戦のために、援助物資は必要を大きく下回る量しか確保されていない。その上アディス・アベバからの援助ルートは閉ざされ、スーダンからのルートもエチオピア政府軍からの爆撃を避けるために輸送は深夜にしかできず、その量は非常に限られている。干ばつの原因だけではなく援助の面でも、飢餓は人災の様を呈してきている。

また、内戦の側面からエリトリア、チグレが注目を集めるにつれ、内戦のはざまで忘れられている地域が生まれてきている。今回のゴジャムなどは、まさにそういったスポットのひとつである。これらの地域はいずれも、今はまだ大丈夫である。しかし、2、3カ月後にはどうであろうか。手持ちの穀物を食べ尽くし、今年のための種も食べ尽くし、家畜を売り、そして……。次の収穫は12月、それも今年の雨季が順調に来ての話である。それは、余りに遠い。

私が今回、ゴジャム東部での緊急援助のため、エチオピアにしばらく残ることを決めたのは、彼らに対する同情や使命感のためではない。「あの写真」から目をそらさずに、自分の村で生きていこうとする人々の気持ちに動かされたからだ。政治と自然環境の中で痛めつけられつつも、明るさを失わない人々の笑顔に魅かれたからだ。

私はスペシャリストではない。まずは、彼らとの生活に、共同作業に没入することからはじめている。没入するなかから、何かが見えてくるにちがいない。



もうすぐ水がわくぞ、

生きるための農業 サクーン村の試み

パイ・ソイサクラン

(タイ・プリラム県サクーン村, 村長)

3月5日から8日まで京都で開催された「アジア NGO フォーラム」出席のため、JVC のカウンターパートであるタイのパイ村長が来日した。フォーラムでの日程をこなしたあとさらに一週間滞在し、福岡正信氏⁽¹⁾、小泉英政氏⁽²⁾、金子美登氏⁽³⁾などを訪問した。

フォーラムでは NGO 関係者に、JICA 研修センターにおいては外務省や JICA の役人に、そして JVC の事務所で、松山の講演会で、各農家で、パイ村長は東北タイでの「豊かに生きるための農業」の推進について話すとともに、日本の政府・企業が、タイ政府・企業と結託してタイの農村を疲弊させていることについて、するどく抗議した。その声を真摯に受け止め、今後私たち一人ひとりにはなにをすべきか、重い課題が残った。以下は、パイ村長の話のを要約したものである。

サクーン村と私

サクーン村は約60年前、3つの地方から移ってきた人たちが核となってできた新しい村である⁽⁴⁾。私の両親はマハーサラカム県から新天地を求めてやってきた。臨月だった母は、サクーンにたどりついたその日に私を産んだ。当時、村の周りには豊かな森があったので、米と綿や桑などを栽培するだけで食べる物には困らず、生活は豊かであった。

14歳で小学校を卒業⁽⁵⁾した私は、学問を続けたいと望んでいたが、兄弟も多く、家族からは働くことを期待されていた。そこで、2年間牛飼いの牛追いとして働き、普通の牛追いの倍の牛の世話を引き受けて、牛2頭を報酬として家族にもたらし、その後16歳のとき学問のできるどころ、つまりお寺に見習い僧として入った。20歳になると見習い僧から僧となり、引き続き勉学に励み、若い僧の教育にも従事した。

当時、サクーン村は荒れていた。ならず者が幅をきかせ、村での博打、深酒乱闘、強盗などが日常茶飯となっていた。このまま放っておけば、子供たち

の未来はないと思い、私は約10年の僧院生活に別れをつけて還俗^{げんぞく}し、しばらくしてラー（妻）の親や寺の師に望まれ結婚した。当時は村長からしてならず者で、いくつかの派が抗争を繰り返していたが、私は誠意を持って彼らに対応した。ある者は改心し、ある者は逃げるように村を出て行った。1965年、私はみんなに推されて村長になった。

村づくりに着手

村を開発するためには、まず村人を開発しなければならぬ。幸い私にはお互いに信頼して開発を推進できる小学校の教師と、寺の僧侶がいたので彼らと協力分担して、青少年や村人の教育から着手した。昔話を引用したり、自分で工夫したりして人間開発に努めた。たとえば、ある日私はパパイヤの木に穴をあけ蜂蜜を塗りつけた。蜂がやってきてそこに巣を作り忙しく働き始めたところで、別の木の枝に鶏の頭をくくりつけた。腐った鶏の頭は臭気を放ち、たちまち蠅でまっ黒になった。

これらを確認してから、私は村人を集めた。「蜂

(1) 愛媛県伊予市在住の自然農法提唱・実践者。自然農法はインド、タイ、フィリピンなどでも実践されており、福岡氏は行き詰まった近代農業からの救世主として広く知られている。

(2) 成田空港建設に反対して1971年から三里塚に入り、73年に強制代執行を受けた農民、小泉よねの養子となった。空港の第二期工事予定用地内に住み、化学肥料、農業を使わない野菜の共同出荷を続けている。

(3) 埼玉県比企郡在住。化学肥料、農業を使わない農業を続けるとともに、国内外から研修生を常時多数受け入れて育成している。数年まえからゴルフ場建設反対・リゾート

法反対運動にも忙しい。

(4) 東北タイでは、伝統的に村の戸数が増えて飽和状態になったと感じると、パイオニアが未耕地を探しに旅立ち、見つかった他の人たちも呼んで新しい村を作る習慣が続いていた。現在では未耕地は消滅した。

(5) 当時の小学校は4年制。パイ村長のように入学・卒業の年齢もまちまちだった。

(6) 北部、東北部のラオ系の人たちは、通常は蒸したもち米を主食としている。近年は電化に続く炊飯器の普及などにより、夕食にはうるち米を食べる家庭もでてきている。



はなにををしているのだろう」。村人は蜂が一生懸命働いて家を作り、子供を育て社会を構成しているのを見てとった。しかも、蜂の作る蜜はとびきりおいしくて役にたつ。

「蠅はなにををしているのだろう」。蠅は家も作らず、仕事もせず、腐ったものに集まって無秩序に騒ぎ嫌われるだけだ。「みんなどちらが好きか？」と問うと誰もが蜂と答えた。「蜂がこんなに見事な社会を作っているのだから、我々ががんばろうではないか」。

村人は、こうしてみんなが協力しなくては村の開発はできないことを学んでいった。私は村人を17のグループに分け、お互いに助け合い、刺激しあって開発できるようにした。毎晩集まって、なにをすればいいかみんなで話し合った。

まず、小学校を建設しようということになった。サクーン村には小学校がなく、お寺の一部を教室として使わせてもらっていた。自分たちで材木を集めたが足りない。そこで伝統的な寄付の方法にしたがって定期的にひと握りずつの米を「村の基金」に喜捨してもらった。その米を売って基金を増やし、5年後に小学校を建設することができた。このようにして、「村の基金」でお寺の建物を建て、各戸に水がめ、便所などを作った。

政府はうるち米⁽⁶⁾、ジュート、砂糖きび、キャッサバなどの輸出用換金作物の栽培を奨励した。耕地拡大のため森林が切り払われて自然の恵は失われ、農家では種や化学肥料などの購入費がかさんで借金に苦しむようになった。その

結果、借金のかたに農地を手放したり、乾季になるとバンコクに出稼ぎに行かねばならなくなった。私はこれらの状況を見るにつけ、政府のいいなりの農業では農民は殺されてしまうと考えるようになった。まず農民が食べるために農業をなんとかしなくてはならなかった。

1984年のある夕方、私は村人を村から1キロほど離れた共有地を集め、ここに桑の木を植えようではないかと提案した。共有地を開墾することは法律に触れる。私はいざというときには全責任を負って逮捕される覚悟でいた。みな賛成し、次の日から手に手に鋤やシャベルを持って集まり、5日後には大きな木を残して72ヘクタールの土地を整備した。たくさんの近隣の村の人たちが手伝いに集まり、差し入れも続いた。一時は政府との間に緊張もあったが、最終的には逮捕されるどころか、桑の木を無償で提供してくれた。この土地は0.16ヘクタールにつき年40バーツで村人に貸し出し、賃貸料はすべて「村の基金」に入れることにした。今、蚕は1年に4回繭を作り、村人は繭を売り、緋の反物に仕上げて大きな収益を上げている。

この頃、NGOを知った。彼らの企画でいろいろな地域の開発の事例を見たり、意見を交換することができ、サクーン村開発のための大きなヒントを得た。言葉より実行、さっそく私は村で一番貧しく、乞食までしている農家7軒を誘って、それぞれの田んぼの片隅に池を掘り始めた。最初は私の妻でさえも、「収穫が減るのに、なぜ田に池を掘るの」と不服そうだった。乾季の土は固い。岩のような土を息



池を掘って魚を育てる

子と2人で掘るのに何カ月もかかった。

雨季たけなわのある日、私は池を掘った田んぼに妻を案内した。池に網を打って妻に引かせると、網には食べきれないほどの魚がかかった。私は、驚いたり喜んだりしている妻に、池の水が雨季には水田にも溢れ、魚の糞が稲の肥料となること、稲につく虫は魚に食べられてしまうため、肥料いらずで稲の成育がすばらしいことなどを説明した。掘った土で築いた土手にはマンゴーやバナナなどの果樹、スパイスや野菜、薬草などもよく育ち、雨季だけではなく乾季にも池の水を利用していろいろなものを植えられるようになった。

女はおしゃべりだ。妻があちこちで私の田んぼの池のことを話すので、この農業は村のみんなに注目され、次の年には池を掘る農家が100軒に広がった。私の家でも別の田に、今度は妻と娘も加わって4人で7カ月掘り続けてもっと大きな池を作った。3年目には201所帯のサクーン村で165軒の農家が池を掘り、現在では近隣11カ村にまで広がっている。鶏、アヒル、豚、牛、水牛などの飼育も以前より盛んになり、糞が肥料として役立っている。

日本の進出が村を破壊させる

サクーン村は豊かになり、出稼ぎもほとんどなくなったが、タイ農村全体のおかれている状況は憂慮にたえない。東北は干ばつにあえぎ、南部は水害に見まれ、中部は農業づけ、バンコクは人と車の洪水で人の住む空間とは言えず、北部ではエイズに苦しめられている。東北タイでは、以前には5年に1度の割合で干ばつがあったが、今ではキャッサバなど商品作物の栽培のため、森を開墾し尽くしたせいから5年間干ばつが続きっぱなしだ。

「東北タイ緑化（グリーン・イサン）」のキャンペーンは誰のためのキャンペーンであろうか。緑化といっても大規模植林のほとんどはユーカリである。タイにおけるユーカリ植林は日本のパルプの大量需要によって火がつけられた。タイ政府が軍まで投入して植林を推進しようとする陰に、タイ企業と合併した日本の企業があり、日本政府がある。タイ最大のユーカリ会社「スンファセン」は日本の企業と提携して48,000ヘクタールの植林を推進するとともに世界一のパルプ工場を建設しようとしているが、植林予定地には森林保護区域や既存の村などが含まれている。また、王子製紙をはじめとする日本の大手製紙業15社とタイ企業の合併会社「タイ・ユーカリ

資源」はなんと300,000ヘクタールもの植林を計画している。その背後で日本政府機関であるJICA（日本国際協力事業団）はユーカリ植林による弊害を覆い隠そうと画策することに余念がなく、ODAで輸送や輸出に支障がないよう、道路や港湾の整備を推進している。

たくさんの村人が大企業のユーカリ植林のため長年住み慣れた村を追われようとしている。「東北タイ緑化」がそこに生活している人たちのための緑化でないことは確実だ。ほんの少ししか残っていない自然保護林をも切り倒し、伐採を目的とした生態系の回復とはほど遠い単一樹林の植林を続けると、東北タイはいったいどうなるのであろうか。虫に強いユーカリには赤アリさえつかない。虫がいなければ、人より精勤に植林し生態系の回復に寄与している鳥が来ることもなく、自然は衰弱せざるをえない。

タイ・日合併企業による、東北タイ一帯での牛、水牛の買い占めも進んでいる。サクーン村でも、ひところ400頭以上いた牛が半分に減った。これにはタイ・日両政府もからんでいる。なぜなら、牛や水牛が減った村に、政府の開発委員がトラクターの購入をもちかけてくるからだ。サクーン村以外の村にはトラクターが普及し始めた。トラクターは糞をしないので、続いて化学肥料の売り込みが始まる。トラクターも化学肥料も日本の会社が作っているものだ。彼らは耕起に必要な牛や水牛を肉として売って儲け、トラクターや化学肥料を売って二重に儲けている。

タイ・日合併企業による、工場用地としての土地の買い占めも進んでいる。ラオス国内やメコン川に数十カ所にもおよぶダム建設の計画があるが、日本はこれでまた一儲けしようという算段だ。ラオスの自然を破壊して作られるダムからの電力や水のほとんどはタイに送られるのであろう。それを利用して工場経営するために、今から早手回しに土地を買い占めておこうというのだ。もうたくさんだ。食べても食べても満腹することを知らない日本政府と企業、それと結託して儲けようとするタイ政府と企業。もう、一歩たりとも私たちの庭に入ってきて欲しくない。私たちは私たちの手で、利潤追求だけではない新しい社会を作るから、邪魔をするのはやめて欲しい。（翻訳・文書―岩崎美佐子）

日本の開発教育(2)

JVC執行委員

東和大学国際教育研究所教授

室 靖

4 章 学校教育における開発教育

どこの国でも開発教育は、正規の学校教育(formal education)と、学校外の教育(out of school educationあるいはnon-formal education) — わが国で「社会教育」と呼ばれているもの — の両方でおこなわれる。本章ではこのうち前者について、わが国の現状を報告する。

前章(3-1)で述べたように、開発教育に関する限り日本は欧米諸国に比べて著しく遅れているが、この遅れは特に学校教育の面で目立っている。それには日本の学校教育体制全体の性格が大きく関係している。

4-1 中央集権的な学校教育制度

明治時代に近代的な学校制度が確立して以来、わが国では常に文部省が教育の普及・振興に責任をもってきた。第2次大戦後、教育の地方分権が制度化し、各地方自治体に教育委員会が設けられるようになった現在でも、小・中・高校各段階のカリキュラム(教科群)を決定するのは文部省であり、地方教育委員会ではない。文部省はまた、各教科ごとに詳細な内容の「学校指導要領」を編集し、各学校に示している^{注(1)}。児童・生徒が学校で使う教科書の内容は学習指導要領に従って編集され、しかも必ず文部省の検定を受けなければならない。文部省が編集する学習指導要領は理論的には一つの「参考資料」にすぎないはずであるが、中央依存の伝統がきわめて強いわが国では事実上「強制力」をもっている。

このような集権的な学校教育制度のもとでは、文部省当局者が開発教育に積極的な関心を示さない限り、個々の学校教育のなかに開発教育が導入されることは難しい。ところが、先に述べたように(3-1)、文部省はこれまで開発教育について積極的に理解を示してこなかった^{注(2)}。

注(1) 日本とちがって民主主義とともに教育の地方分権

が確立している国では、中央政府が「学習指導要領」に当るものを作ることはない。アメリカ、カナダ、また第2次大戦後のドイツでは、教育は州政府の責任である。イギリスにいたっては、教育の分担はさらに徹底しており、学校で何をどう教えるかは郡や市の教育局ないし学校長の裁量にまかされてきた。

注(2) 但し、文部省の付属機関である国立教育研究所の金谷敏郎主任研究員(開発教育協議会理事)のイニシャティブで、1983年同研究所のなかに「開発教育カリキュラム研究会」が作られたことは、一つの新しい動きとして注目される。

4-2 学校教育の偏向

開発教育は、開発の遅れた諸国に住む人々の問題を理解し、共感を覚えるような市民を育てることを目標にする。いいかえれば、開発教育の理念は利他主義的な(altruistic)価値観にもとづいている。不幸にして、現在日本の学校教育を支配しているのは、進学のための過度の競争主義である。現に多くの教師にとって最大の課題は、自分が教えている子供をどれだけ多く有名な学校に進学させるかに他ならない。また自分の子供の学業成績だけを心配する親達は、子供を勉強にかりたてることに懸命になっている。このような教育環境のもとで確実に育つものは — たとえ親や教師が意図したものでないにしても — 子供の利己的性格に他ならない。過度の競争主義に毒された現在の日本の学校教育は、同時に子供 — つまり将来市民 — の視野の拡大をさまたげ、想像力の芽を摘み取り、他人への共感や同情心を育てようはずがない。現に子供にとって本来は仲間であるべき級友は、競争相手以外の何ものでもないといった状況である。

このような教育環境 — それは社会の価値観の反映でもあるが — のもとでは、海の彼方の国の問題に興味や関心をもち、そこに住んでいる貧しい人間への共感を育てようという開発教育は、そうでなくても忙しい学校教師にとっては、新しい負担であるだけでなく、受験教育にとって無用の邪魔物でしかない。要するに、過度の競争主義に偏向している日



本の学校教育は、開発教育にとってはきわめて不毛な環境となっている。

4-3 非国際的な高等教育

日本の開発教育の遅れをもたらしているもう一つの要因は高等教育の非国際性にもとめられる。現在わが国ではおびただしい数の大学が小・中・高校の教師を養成しているが、開発教育の指導者を養成するようなコースをもっている大学は、事実上見当たらない^{注(1)}。開発教育の教師を養成する場がないだけではない。600を超えるといわれるわが国の大学のなかで、「南北問題」あるいは「開発」について本格的な講座を置いているところされない^{注(2)}。そのため、開発問題の本格的な研究を志す日本人は欧米の大学や大学付設の研究機関に留学する他ないのである。

わが国の高等教育機関の保守的な性格と、小・中・高校レベルの学校における開発教育の不振の間には「ニワトリと卵」の関係が見られる。高校以下の学校で開発教育の重要性が認められない限り、大学側に開発教育の指導者を養成する動機は生まれない。一方、大学教育が保守的な教師陣によって運営される限り、開発教育の指導者は育たないからである。

注(1) しいて求めれば、筑波大学大学院の地域研究学科の一部(東南アジア研究、あるいはラテンアメリカ研究)と環境科学研究学科の卒業生のなかに、潜在的な開発教育者の候補がいるかもしれない。

注(2) もっとも、筑波大学、上智大学、帝塚山学院大学、亜細亜大学、明治学院大学、東京農業大学などの様に、経済学部や政治学部のなかに、「国際経済」、

「国際関係論」等の名で、開発に関係する講義が行われている場合はある。なお、最近では大学生のなかに卒業論文のテーマとして「開発教育」をとりあげようとする者が少しずつ増えてきているようである。

4-4 学校教育の中での開発教育の例

以上述べてきたように、日本の学校教育体制は開発教育の普及・振興にとって良い環境にはないが、そのなかで開発教育—あるいはそれに近い教育—を行っているいくつかの実例がある。

まず、「ユニセフ募金」に参加している6800の学校(小学校約5200, 中学校約1100, 高等学校約500)をあげることができる。先に述べたように(1-2), UNICEFは開発教育の振興に特に熱心な国連機関であるが、わが国では日本ユニセフ協会が児童・生徒を対象にUNICEFのための募金活動を行うと同時に、すぐれた教育資料を作って開発教育の普及に力をいれてきた。ユニセフ募金に参加している学校グループのうち、日本ユニセフ協会所有の開発教育用資料を活用している学校数は約2000校といわれている。

次にUNESCOが1953年から推進してきた「国際理解教育」に協力してきた学校群がある。UNESCOが始めた国際理解教育は初期のうちはどちらかというと先進諸国間での相互理解に重点がおかれていた。しかし、その後開発途上諸国の数が急速に増えてきたことから、UNESCOは1974年の総会で、それまで推進してきた国際理解教育の概念を見直し、新しく「国際理解、国際協力、国際平和、人権、基本的自由に関する教育」(略号「国際教育」)という、より広い概念の教育の推進について決議を採択した。それ以来「国際(理解)教育」には、広い意味での開発教育の要素が加わるようになった。現在わが国には(社)日本ユネスコ協会連盟の技術的・財政的支援をうけて国際理解教育の実践を行っている「ユネスコ共同学校」が23校(小学校3, 中学校11, 高等学校9)が存在しているが、そのなかには「国際理解教育」の名で特に開発途上諸国の問題を取りあげようとする学校が少なくない。その意味では「国際理解教育」と「開発教育」が融合してきたともいえる^{注(1)}。

一方、数のうえではまだ限られているが、最近では開発教育そのものの概念をはっきりと把握し、積極的に実践する学校や教師も現われるようになっていく。この現象は特に私学の面で顕著にみられる。どの国でもそうであるが、わが国でも新しい理念をもつ教育の実践は、まず私立の教育機関から始まる。特に公教育関係者の間に文部省への依存傾向が強い日本の場合、文部省当局者自身が関心を示さないうえに、公立の学校がとりあげることは容易でない。その点、私立学校では教師の創意を生かした教育実践を試みるのが可能である。特に、初等教育から高等教育までを通して行う私立の学園の場合、入試準備に無用な努力を必要とすることが少ないだけ、新しい教育理念を実現しやすい。このことは、「入試に役立たない」開発教育の実践にとって好ましい条件である。いずれにしても、わが国の場合開発教育の導入のうえで私立の学校が果たする先駆的な役割は大きいといえる。

注(1) 以前から「国際理解教育」という用語を使いなれてきた学校教育者たちの間には、「開発教育」という新しい用語への違和感がある。そのためわが国では後者を前者の一種と捉える傾向が強みられる。

5 章 学校教育外での開発教育

わが国の場合、開発教育活動は学校のなかでよりも、むしろ学校教育外の方が活発である、といえる。学校外——すなわち社会教育——として開発教育にかかわっているところとしては、開発教育そのものを進めるNGOsを初め、第3世界諸国で直接開発協力活動を展開しているNGOs(開発協力NGOs)、青少年団体、婦人団体、各種の市民グループ、さらにマスコミ機関などをあげることができる。

5-1 開発教育を志向するNGOs

欧米諸国に比べるとかなりスタートが遅れているが、わが国でも最近アジアを中心とする第3世界に対する市民の関心が高まってきたことを反映して、広い意味で開発教育にかかわるNGOsが急速に増えてきている。NGO活動推進センター(JANIC: Japanese NGO Center for International Cooperation)が1988年3月刊行した「NGOダイレクトリー」には、開発教育を志向するNGOsが約40収録されている。その殆どは小規模のNGOであり、社会的な影響力

も限られているが、中には4章(4-4)で紹介した日本ユニセフ協会、日本ユネスコ協会連盟をはじめ、国際協力推進協会や、ハンガー・プロジェクト(The Hunger Project Japan)、日本YMCA同盟、アジア太平洋資料センター、熱帯林行動ネットワークなど、国際的なネットワークを有し社会的に影響力をもっているNGOも存在している。

これらのNGOの開発教育思想は、先述の3章(3-2)で述べた異なった思想を反映しており、時には互いに対立する傾向さえみられる。わが国の開発教育界を代表するNGOとして1982年に組織された「開発教育協議会」の目的の一つは、異なった思想に立つ開発教育NGOの間での思想交換の場を提供することにあった。しかしながら協議会には上述のような有力な開発教育NGOsで会員になっていないところもあり、この目的は充分に達成されているとはいえないのが現状である。

5-2 開発協力NGOs

第3世界で直接開発協力活動に参加しているNGOsの多くは、同時に日本国内で開発教育と呼べる活動を展開している。海外での協力活動をつづけるために国内で推進する募金活動には、常に教育・情報の側面がともなうからである。その場合直接途上国に出かけて働くNGOの要員——ボランティアや専門家——は、途上国がかかえている貧困をはじめ低開発の現実を直接経験して帰国する。NGOが国内でおこなう募金活動に際して最も効果を発揮するのはそのような生きた体験のフィードバックである。その意味でNGOが海外に送り出した協力要員は、開発教育者の貴重な潜在的リソースである^{注(1)}。

しかしながら、開発協力NGOが募金活動の一環としておこなう情報・教育活動は、先に2-1で触れた第1世代の開発教育以上のものになり難い、という限界がある。一般市民の善意に訴えるためには、第3世界の悲惨さを強調しなければならないからである。例えば、「餓えのため手足がハリガネのように細く、腹部だけが異常に膨らんだ子供」の写真は、善意の市民の心情に訴えるうえで直接効果がある^{注(2)}。

開発協力の経験を積んだNGOの人々は、途上国の民衆を苦しめている飢餓や貧困の根源的要因を理解しているはずであり、従って第2世代の開発教育

(2-2)や第3世代の開発教育(2-3)の必要も充分認識しているはずである^{注3)}。しかし、そのような志向の開発教育は同時に募金にとって効果がなくなるものであると理解される。開発協力NGOが開発教育を行う上で非常に難しい点であると思われる。

注(1) 同じことは青年海外協力隊(JOCV: Japan Overseas Cooperation Volunteers)の帰国隊員についてもいえよう。

注(2) 事実1984~85年に先進諸国で展開されたアフリカの飢餓救援キャンペーンでは、テレビを通じてこの種の映像を伝えることによって大きな成功をおさめた。

注(3) この点に関して付言しておきたいことがある。近年途上諸国のなかに自国の貧しい住民の生活向上を目指す土着のNGOが次々と育って来たことから、先進国側の開発協力NGOの役割が改めて見直されつつあるということである。すなわち先進国のNGOが従来途上国で実施してきた低開発プロジェクトは、現地側のNGOの手にまかせ、自らは先進国の市民を対象に第2世代や第3世代の開発教育の推進に努力すべきである、という思想がしだいに主流を占めるようになっていく。いいかえれば、先進国のNGOにとって重要なことは、一方的な開発協力よりも、自国の市民へむけての開発教育活動である、という主張が急速にきかれるようになったということである。

5-3 その他のNGOs

学校教育の外で開発教育に関心をもっているNGOsとしては、以上の二つのNGOグループ以外に青少年団体、婦人団体、さらに労働団体組合や生活協同組合などがあげることができる。いずれも本来はそれぞれ別の目的を追及するために生まれたNGOであるが、最近では広い意味での開発教育にも関心を持つようになったものがある。

5-3-1 青少年団体

直接ないし間接的に開発教育にかかわっている代表的な青少年団体としては、中央青少年団体連絡協議会(中青連)、日本青年奉仕協会(JYVA: Japan Youth Volunteers Association)、日本YMCA同盟などがある。中青連とJYVAは毎年アジア諸国から青年指導者を招いて、わが国の青年との交流をはかっている。また日本YMCA同盟はわが国の開発教育協議会の発足以来その事務局の役割りを担ってきた。一方地域的な青年団体としては、特定のアジア

の国で継続的にワークキャンプを組織してきた名古屋YMCAやとちぎYMCAをはじめ、日本の青年にアジアの農村地域の実態を学ばせるためのスタディ・ツアーや、アジア諸国で農村開発に取り組んでいる若い活動家を招いて日本の青年との交流事業を行うNGOも現われている^{注(1)}。

注(1) 例えば南方圏交流センター(鹿児島市)、北海道国際交流センター(函館市)等。

5-3-2 女性グループ

わが国の場合、社会教育としての開発教育の推進の上で女性グループの潜在的な役割はきわめて大きいといえる。一般的に言って第3世界諸国においては男性に比べて女性の地位は低く、女性は家庭の内外でしばしば過酷な労働を強いられ、悲惨な生活をしていることが多い。一方、今だに男性中心主義(male chauvinism)の傾向が強い日本においても、女性の社会的な役割はまだ限られている。女性が弱い立場に置かれているという点で、日本と発展途上諸国の女性の間に共通の問題がある。

また、開発教育は第3世界諸国に住んでいる貧しい人間への関心から始まるとも言える。ところが「会社人間」になって毎日の仕事に追われるわが国の男性の社会的・国際的な視野はどうしても狭くなる。これに対して女性には世界的な問題を考えるだけの広い視野をもつ余裕がある。特に女性の教育的水準が高まってきた日本では、女性がグループをつくって社会的な活動をする現象が次第に現われている。具体的な例としては、アジア諸国で抑圧と貧困に苦しんでいる女性の立場に立って、日本国内で教育・啓蒙活動を行っている「アジアの女たちの会」(松井やより代表)をあげることができる。いずれにしても、人口の半分以上を占める女性に焦点を置く開発教育運動が女性グループの手で展開されることの意味はきわめて大きいというべきである。

(次号につづく)

この論文は笹川平和財団にて実施された昭和63年度事業「日本の開発教育」の研究資料として作成・提出されたものです。



10年間支えてくださってありがとうございました

3月17日(土)東京築地本願寺において、JVC創立10周年を記念して「感謝の夕べ」が催されました。インドシナ難民救援のため、バンコクでJVCが誕生してこの2月で満十年を迎え、これを機に今までの多大なご協力に対しての感謝の意を表わし、あわせてこれからのご支援をお願いしたいと企画されたものです。

私も当日朝から準備の手伝いのため参加して、クローク係を受け持ちましたが、人の多さもさることながら様々な顔ぶれに驚いてしまいました。来賓で呼び出した浄土真宗本願寺派のご門主大谷様、エチオピア大使、ソマリア大使代理、朝日新聞社の伊藤氏、MSF(国境なき医療団)代表のシャロン氏、タイ・サクーン村のバイ村長、ラオス・女性同盟生活改善普及員養成学校校長のカモンさん、そして全国から駆けつけて来てくださったOBやボランティアの方々など、250名が集い、いろいろな国の言葉が往き交いました。また子供たちはここで友達になっ

て会場内を手をつなぎ合って歩くなど、とてもにぎやかで和やかな雰囲気に終始包まれていました。

当日はボランティアの方々による、手作りの現地食が供され、会場に設けられた各プロジェクトのコーナーでは、現地での活動を紹介するパネルの展示やコーヒーセレモニーなどが催されました。また別室では、JVCの歴史のスライドやMSFの活動紹介のビデオが上映され、ロビーでは各国の手作りの民芸品の即売も行われました。

乾杯の音頭をとって下さった初代JVC代表、川口氏の「このように多くの結びつきを与えてくれたJVCに感謝」の言葉が、私の心の中に響きました。私自身JVCの活動に参加してまだ3カ月余り。JVCがこの10年頑張ってきた功績を前にして、その空白を埋めるには少したじろいでしまいます。これからのJVCの活動の中に、私はどのような足跡を残していけるだろうかと自分に問い直す一日でもありました。(JVC神奈川ボランティア 脇谷 勢津子)



特別顧問 星野昌子



カモンさん(ラオス女性同盟)



バイ村長(タイ・サクーン村)



10周年記念式典
「感謝の夕べ」



ラオスの織物が教えてくれたこと

日本の人にラオスの秀れた織物文化を紹介し、その評価を通じてラオスの人たちに、あらためて自分たちの文化に誇りを持ってもらい、継承していつてくれる事を目的とした「ラオス幻の布展」がJVC創立10周年記念事業の一環として、表参道のギャラリー「IKAT」との共催で、この3月12日から21日の間開かれた。

この期間、布は展示のみに限られたが、展示会に先がけて、3月2日から6日間催された「ラオス・フェア」では、ラオスという国全体を紹介するためのパネル展示やスライドの映写等と、布の販売も行われた。また特別企画として、在日ラオス人による伝統舞踊や民族楽器の演奏、ラオス料理の販売等も行われた。舞踊を披露してくれたラオス人と観客が一緒になって踊ったり、民族楽器について盛んにラオス人に質問する人がいたり、ラオス料理も飛ぶように売れた。大勢の人に、日本にはまだ馴染みの薄いラオスの文化に親しんでもらう事ができたと思う。

しかし何といってもラオスの布に対する反響は予想以上のものがあり、関西方面や遠く北海道からも開催に関する問い合わせが相次いだ。ギャラリーの主催者・柳清子さんの言った「一枚の布を見ていると、そこに文化や歴史が全部織り込まれていて、小説を読んでいるような楽しみがある」という言葉を裏づけるように、何時間もかけてじっくり布を見て



いく人や、数回にわたってギャラリーに足を運ぶ人もいた。

今回の催しは、布の展示と販売の期間が分かれていて、宣伝の中心が展示の方に置かれていた事もあり、売り上げは今一つであったが、ラオスの布の知名度を高め、広く関心を巻き起こす事については、大きな効果があったと思う。ただその関心の内容については様々だった。布を通してラオスという国の文化に、純粋に関心を持ってくれる人ばかりとは限らないからだ。あらゆる物を商品として捉えてしまう傾向のある今の日本では、この展示会でラオスの秀れた布の存在を広める事が、ラオスにおいて現在進んでいる貴重な織物の流出に拍車をかけることに（JVCがラオスで布を購入した事も含めて）影響を与えるのではないかという疑問も残る。ただでさえ、日本がラオスに対して一方的に与えている影響力の大きさは、日本人自身にはなかなか自覚しにくい。しかし逆にそれ故に、そのような日本とラオスの不均衡な関係を改善していくのに、文化の本当の価値を知り、広めていく事は、相手への関心・理解や敬意を深める上で欠かせない事であると思う。

今回の展示会を通して、ラオスとの間に対等でより良い関係を築いていく事の困難さを痛感させられた。しかし同時に、共に準備に携わってきた仲間や在日ラオス人たちとの関わりを通して、大きなやりがいを感じる事ができた。今後はその関わりを土台にして、より良い形でラオスとつながっていく道を模索していきたい。

（JVCボランティア 岩間 邦夫）



第8回JVC会員総会 開催のお知らせ

日時：1990年6月10日（日）午後1時～4時

場所：東京都婦人情報センター（〒162 東京都新宿区神楽河岸21-1 セントラルプラザ15F）

詳しくは、同封の案内をご参照ください。

'90春 ゆく人くる人

岡村達司さん・^{い お た}藺牟田浩美さん パナニコムへ

●4月からタイのパナニコムキャンプへ日本語教師として赴任する岡村さんは、JVC神奈川で1年半ボランティアとして活動してきました。主な活動は横浜のポート・ウォークだったそうですが、それ以外にも色々な仕事を手伝っていました。岡村さんはJVC神奈川のスタッフだとばかり思っていた私は、ボランティアときいてびっくりしました。

以前、岩崎さん(JVC代表)が「生き方としてボランティアを選択することは難しい」と何かに書いていましたが、私にとっては、岡村さんのようにJVCと関わるのはなかなか勇気のいることなのではないかなと思ってしまうのです。JVCにはそういう人がたくさんいるので、岡村さんも「そんな大げさなことじゃないよ」と言いそうです。

今回タイへ行くことについては、「これからJVCと関わっていく上で、最初の現場経験」と言う岡村さんでした。

●それまでは普通にお勤めをしていたのですが、以前から現場で働いてみたいと思っていた藺牟田さんは、JVCの日本語教師の話聞いて早速応募したそうです。

パナニコムでの抱負は、「日本語教師としては、日本へ来る難民の人達が少しでも早くこちらの生活になじむための足がかりとなるようにがんばりたい。そして、個人的には色々な国の色々な人会遇到、こたわりとか気負いとかをなくして自分の場所をみつきたい」ということでした。藺牟田さんは29歳とは思えないとても笑顔の素敵な人でした。

これから1年間タイでがんばって下さい。



清水俊弘さん カオイダンから神奈川オフィスへ

●'87年10月から2年間、タイのカオイダン(カンボジア難民キャンプ)のスタッフとして赴任していた清水さんが帰国しました。清水さんは、4月からJVC神奈川の山口さんがアフリカ担当として東京事務所に移るので、その後任として、来月から横浜・産貿センターの神奈川オフィスに勤務することになりました。

向こうにいて感じたことは? 「うーん、(人間で)みんな同じなんだなと思ったよ」同じってどんな風に? どんな時に? もっと具体的に知りたいと思ったのですが、それを言葉で説明するのは難しいようです。これからの抱負は? というところ「抱負はね…、なし」と全く困った清水さんです。でもきっと『不言実行』と言いたかったのでしょう。

その日清水さんは、岡村さん達の事前研修で、タイ国境近くの難民について地図を書きながらとても丁寧に説明をしていたのですが、私も横にいて学校の講義より勉強になると思わず聞き入ってしまいました。

山口さんに代わって、JVC神奈川をよろしくお願いします。

(金成 邦子)



JVCプロジェクト

1990年3月25日現在

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
東京本部	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～8時 毎月第2、4土曜日 午後2時～4時	全国社会福祉協議会	岩崎駿介（代表） 林 達雄（事務局長） 熊岡路矢、星野昌子、前川昌代、鶴田三芳、加藤志保、岩崎美佐子、富安光子、池島千津子、鈴木由子、富安庸太郎、アイネス・パスカビル
神奈川県 (JVC神奈川)	神奈川県内における渉外、事業計画、情報収集、資金調達等を行う。 神奈川県および県内の市民団体との共同事業の企画、運営。		山口誠史、清水俊弘
日本国内	●定住難民プロジェクト 3月15日、東京都町田市にある真光寺中学校で卒業生200名に対して、カンボジア少年コン・ブンティーくんと小野豪大が、カンボジア国やカンボジア難民について講演した。特に、ブンティーくんの体験談には、みんな静かに聞き入っていた。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金、ケアハウスさくら苑 チャリティーカレンダー	小野豪大、他約60人
	●東金農場 自給用の野菜を作っている。 東金で産直運動をしている“さかさま農園”や山武ボランティア協会などと、毎月1回勉強会を行っている。		松岡美奈子 東金市民有志
エチオピア (東ゴジャム州) ビチェナ	●干ばつ被災地調査 JVCでは2月中旬～3月中旬にかけて、東ゴジャム州青ナイル川流域の低地を、3回にわたって調査した。 —主要作物であるテフ、ソルガム、メイズの昨年の収穫は、干ばつ、霜、イナゴの被害によりほぼ全滅。 —貯蔵食糧では、最高で1カ月程度しかもたない。既に家畜を手放した者、食を求めて移動した家族、自生する植物の根を食べてかろうじて生きのびている人々もいる。 —2月に政府機関から一部の被災者に対して、食糧配給がなされたが、救援活動が継続される可能性はない。 以上の結果をふまえて、JVCでは4月より食糧配給を中心とする緊急救援活動を開始するため、現在準備中である。 ●総合的復興促進（マーシャ村） 内戦のため昨年11月より中断している。	CRDA, WFP, 犬養道子・みどり一本運動、モラロジーMIRC、東京グリーン・ウォーク、西本願寺、チャリティー・サイクル、Tree for lifeの会、中部善意銀行、朝日新聞厚生文化事業団、毎日新聞社会文化事業団 チャリティーカレンダー	鈴木直喜、山田 盛、江原浩昭、江原広美、田尻真由美、イエットベルク、ソロモン、パレタ、ダニエル、エシャトー、トーマス、シュクール、寿賀一仁、アリ、アビエ

活 動 地 名	活 動 内 容	支 援 団 体	担 当 者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	治安は回復しつつに見えたが、ついにJVCの車も襲撃を受けた。幸い惨事にはいたらなかった。 ●農業による自立促進 乾期の終盤になり、灼熱、砂じんの日々が続いている。この時期、灌漑の必要をヒシヒシと感じる。UNHCRとソマリア政府による難民の再登録がすすみ、農場の難民(農民)も進路を決めつつある。約2年間、厳しい状況の中で頑張ってきた金子と中野が任期を終え、ソマリアを離れた。	UNHCR, 仏国土をつくろう会	磯田厚子, シアッド, ムハボ, アオキ, アブディナサル, ヒレ, ラシッド
ジャララクシ・キャンプ (ヒラン郡)	●農業による自立促進 100haの新農場の建設は、終盤に入った。一方、初めに建設した農場では、以前より改善されたものの、玉ねぎやとうもろこしなどの単一商品作物栽培を行っている者がいまだにいる。農業技術者の船川がその改善に奮闘している。	UNHCR R.I.-Japan	船川秀夫, シュクリ モハメッド
カンボジア カンボット県 プノンペン カンダール県	●サンタビエップ技術学校 / ワークショップ 国土を復興するため物資の国内輸送を担う公共輸送機関の役割を重視し①ワークショップの設立②スペアパーツ・オイル・工具・設備の供給③自動車整備士の養成を初期の目標として、1986年にこの事業を開始した。運輸省自動車輸送公社が現地の実施機関となり、JVCは自動車整備の教官を派遣した。輸送公社は現在539台のトラックを持ち、内103台が日本製。従来日本製トラックのスペアパーツは全面的にJVCが調達していたが、現地政府も最近ようやく自分たちで購入できるようになってきた。当初より訓練を受けてきたのは、ワークショップに配属された輸送公社の職員が中心。他に孤児などをJVCが奨学金を出して研修生として受け入れている。現在生徒・スタッフ合計で42名。訓練では、実習をかねたトラックの修理と並行して自動車工学などの知識を繰り返し教えている。第三期は今年9月より始まる。それに向けて、カリキュラムの整備、カンボジア語の教材・教科書の準備を急いでいる。また、今までの教室は騒音が激しいため、新たに教室棟を建設する。同時に、訓練の効果を高めるため旋盤などの機械類や工具を揃え、実習のスケジュールに間に合うようスペアパーツを調達する。以上が1990年度の主な目標である。 ●RINE(ライン)プログラム〔母子保健活動〕 9月から11月にかけて断続的に1ヶ月間の村の助産婦卒後研修を行った。この研修から、母親カードを使用し始め、村の助産婦は妊娠の異常を早期に発見できるよう研修を受けた。次は伝統的産婆の1週間の訓練を計画している。 12月にプノンペン郡16カ村で、村の一般的な実態調査を行った。これは村レベルでの保健活動を行うための基礎資料となる。 11月末よりプノンペン郡病院・RINEセンター敷地内で、小規模ながらFood Productionを始めた。今のところ野菜畑だけであるが、今後、魚の養殖、養鶏と進めていく予定である。作物は入院患者の食事、RINEの補助給食に使いたい。 ●井戸掘り・給水 1990年からこの活動はOXFAM・LWS・JVCと農業省水利局との共同事業となった。7県とプノンペン市で、今年90本の井戸が掘られる計画である。JVCはこのうち、15本の井戸掘りを援助する。どこに掘るかを定めるため、県の水利局と交渉を始める。	創価学会青年平和会議、モラロジーMIRC、立正佼成会、日産労連、西本願寺、善興寺ダーナ基金、高岡寺族青年会、覚法寺、「チャリティー・ウォークかながわ」、毎日新聞大阪社会事業団、国際ソロプチミスト千代田、明るい社会づくり運動神奈川県協議会、浄土宗東京教区青年会、和平基金、国際保健協力市民の会(SHARE)仏教救援センター、四日市商業高校、日蓮宗宗教務院、横浜市「世界ふれあいキャンペーン」、「お告げのフランシスコ姉妹会」、中部善意銀行、「カンボジア会」、チャリティーカレンダー、堺市ロータリークラブ、日本ボーイスカウト広島第20回全日本仏教青年会、カリタス・ジャパン、「第1回チャリティー・コンサート」、我孫子「ムダの会」真如苑、「武蔵野市100周年キ	古西 勇, 馬 清, 杉江美子, 本橋 栄 [現地の実施・調整機関 と主な担当者] (運輸省) 国際局 メアス・サメット 自動車輸送公社 タック・カン ワークショップ アム・ディエン ゲット・ソーン カム・ボラ (保健省 母子保健局) アン・サルン医師 カンダール県 保健委員会 ニム・ニェム医師 プノンペン郡 保健事務所 サム・サルン医師 母子保健活動 トゥイ・カッ マッ・サモン (農業省 水利局) テ・アヴ・キム 井戸掘り活動 ホック・セタ ソー・サリン
			キャンペーン募金

活 動 地 名	活 動 内 容	支 援 団 体	担 当 者
タイ バンコク事務所	①総務、会計、資金調達 ②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、ラオス・カンブチアを含む、各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集、広報活動 ④在タイ日本人との連絡調整 3月12日～14日、サンカブリ付近の難民（モン族、カレン族）を視察。2月11日にスリー バゴダ バスがビルマ軍に占拠されて以来、付近に住んでいた約 6000 人が難民となっている。 モラロジー研究所（MIRC）の援助で、カンボジア国境にあるタイ被災村の井戸の修理を始める。	全国社会福祉協議会 電力総連	ボンビモン、カモン、 大石道子、チャタヴァデ 主婦ボランティア15名
カオイダン （カンボジア 難民キャンプ）	●西崎憲司記念技術学校 バンタットから先生、生徒とも無事に到着したが、南部のソクサンキャンプからも生徒の応募があり、その調整のため新学期の開始は 3 月 12 日に遅らせてスタートした。現在の生徒数は 536 人。 また次の学期より、難民の本国帰還に向けて卒業生を対象とした短期発展コースを開始する。	UNHCR, SV(Stichting Vluchteling)	ソムヨット・ラタナタム、 スティ・ネップラコン、 井本 勝幸、井本 美奈
バナニコム （第三国定住待ち キャンプ）	●日本語学校 ・日本定住予定者へのプログラム ①日本語教育 ②日本文化・習慣の紹介 ③渡航準備オリエンテーション ・ラオス難民36名の日本出発が 4 月 9 日と決まった。 今回のラオスの生徒を対象に 3 月 12 日より「生活オリエンテーションプログラム」を始めた。生活場面を設定し、視聴覚教材を使い授業を行った。 ① 目的地へ行く ② アパートの生活と習慣 ③ 電話をかける などのテーマを毎週月曜日から木曜日の午後の時間を使って通常の授業と平行して行った。	R.I.-Japan	竹村雅義、熊沢ゆり、 チャフリット・ドゥワンボム 坂井真紀子
地域開発(CD) （バンコク市内の スラム地区） （ブリラム県の M村）	●奨学金プロジェクト 中学へ進学するかどうかチェックするため児童の家庭を訪問した。 ●クロントイ図書館 サムローン地区、Lock 6 の図書の入れ替えを行った。 ●農村開発 農村での井戸掘りの可能性を模索している。 農村にある森林を保護するため、鉄条網を張る計画を立てている。 ●その他 リラ・クンナロンは 3 月末日をもって JVC を離れる。 3 月 19 日から 30 日まで今泉がバナニコムで研修した。	モラロジーMIRC、 Tree for life の会、雄勝町町 内寺院会、国際 ソロブチミスト 駿河、JOFIC、 からし種、チャ リティーカレン ダー	コメン・スンスマン、 リラ・クンナロン、 サムルアイ・ ジョンヨークラン、 今泉 恵
ラオス （ヴィエンチャ ン県 ボーリー・カ ムサイ県 カンムアン県）	●生活改善指導員養成プロジェクト 第一回養成コースの卒業生は、生活改善指導員として出身地域で母子保健を中心とした普及活動を展開している。また地方の普及活動の拠点として計画した、三つの母子センターの建設も順調に進んでいる。現在、JVC のスタッフは、地方の指導員を巡回して激励する一方、4 月に始まる農業コースの準備にあたっている。この準備の一環として 2 月の初め、農業コースのラオス人講師を対象に、東北タイの農村で 2 週間のスタディー・ツアーを行った。このツアーで、東北タイの農民が、農業の近代化の過程で生じた環境破壊、借金、若者の都市への流出等の問題にどのように対処し克服していったかを学ぶことができた。ラオスの農村も将来同じような問題をかかえることになるだろう。	UNDP, UNIFEM, 庭野平和財団、 新潟愛の架け橋 バザー、日産労 連、ギャラリー イカット、聖ヨ ゼフ老人ホーム、 堺ロータリー・ クラブ、老人ホ ーム天寿荘、難 民と地球の緑を 考える会、グル ープ・カンガル ー、ベネフィッ	谷山博史、北詰秋乃、 原田恵津子 トコンサート、JOCV、 チャリティー・カレンダー

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には機関誌の購読料が含まれています。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC 会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC 東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

編集後記

▶ベトナムに生まれ生きるといことは大変なことだ。であればこそ、国内で生き抜いている人に共感と関心を持つ。また過去をそれも仮定で考えるのは無意味なことだが、「もし」かつてこの国が、フランスやアメリカに容易に負けていたら、今の世の中(世界)は、「大国主義」がはびこるという意味でもっとつまらないものになっていたであろう。(熊岡)

▶T/Eの編集を任されて4カ月。4月から前川さんが子連れで復帰する。私はいよいよ現場(タイCD)で活動することになった。どこまで柔軟になれるか、私の価値感を白紙にできるか。自分の可能性に挑戦したい。(池島)



▶みなさまの募金が支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (3月小計 10,000円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (3月小計 169,750円) アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. インドシナ難民救援募金 (3月小計 12,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. カンボジア募金 (3月小計 23,000円) カンボジア国内の復興のために使われます。
- E. タイ・スラム募金 (3月小計 88,000円) バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。
- F. スラムの子供奨学金・基金 (3月小計 725,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- G. タイ農村募金 (3月小計 3,000円) タイの農村開発のために使われます。
- H. 定住難民募金 (3月小計 5,000円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- I. JVC運営経費募金 (3月小計 11,000円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. ラオス募金 (3月小計 50,000円) ラオスの婦人の生活向上プログラムのために使われます。
- K. 無指定募金 (3月小計 351,607円)

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)

加入者名—JVC 東京事務所

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (3月小計212名1,593,357円)

犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

Trial & Error は再生紙を使用しています

1990年4月20日発行(毎月20日発行)

編集人 熊岡路矢 池島千津子

発行人 林 達雄

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎03(834)2388 FAX:03(835)0519

Telex:7604025 JVCHQ UC

JVCインフォメーション:03-835-4583

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下2 産業貿易セ

ンタービル9F(財)神奈川県国際交流協

会内 ☎045(671)7082

印刷所 関ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。